第 534 号

# 音楽の世界

目　次


論壇　やさしい音楽、むずかしい音楽　安田 謙一郎　2

特集　芸術と福祉活動

アフリカ支援から学ぶ　八木 宏子　4

あなたに一輪の音楽を　浦　富美　8

『緑の風』、『緑風舎』訪問記　編集部　12

**音・雑記ーひなの里通信ー** (43) ・・・・・・・・・・・・・・ 狭間 壮　18

**名曲喫茶の片隅から** (24) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 宮本 英世　20

**音 盤 奇 譚** (29) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 板倉 重雄　22

コンサート・リポート　**若い翼による CMDJ コンサート 4**　24

学会報告 国際化時代を反映した日本電子キーボード音楽学会　阿方 俊　28

短期連載

現代音楽見聞記(10)　西　耕一　27

福島日記(5)　小西 徹郎　30

明日の歌を（第五回 Intermission～料理人の聴く世界）　橘川 琢　32

『音の科学と音楽』　〔X〕（補）　大久保 靖子　36

**日本音楽舞踊会議：出版楽譜のご案内 (8)** ・・・・ 高橋 雅光　40

時評 小さな国からの大きな問題提起　水の惑星人　48

◆コンサート・プログラム◆

**～ピアノと室内楽の夕べ～**　42

CMDJ 会と会員の情報　49

# 論壇　やさしい音楽、むずかしい音楽

チェロ　安田 謙一郎

家の末の息子などは一日、ヘッドホンでジャズを聞いている。私が折にふれ集めたブルーノートなどのCDで、定番の別テイクや実況録音が種々雑多にあるから、相当の数になる。私が一日、傍らでチェロを弾いたり作曲したりしているから耳栓代わりかと思っていたが、台所でも聞いているから、単にながら族かもしれない。

CDの持ち主はただ所有しているだけで、全部聞いているわけではない。例えば、どこそこの公演のライブ録音など、体裁は良いが曲もだぶっていたり、会場の雑音が多かったり、マイクの不具合で音量が上がったり下がったりするものもあるから、あまり耳にやさしい音楽とはいえないのである。

それでなくても、ジャズには難解な曲が多い。J.コルトレーンの即興演奏など、神通力を感じるけれど、やさしい音楽ではないだろう。私自身は一演奏家として少しでもあやかりたい気持でくり返し聞いたものだが、音楽に無関係な若者がそれを一日中聞いているとなると、親は心配になるのである。音楽が体や神経にいいものかどうか、疑いたくなるのである。

私がジャズに興味を持つようになったのは、もうずいぶん若い頃からである。それこそ進駐軍の生バンドやデキシーランドなど自然に耳に入ってきたが、そこにモダンジャズの新風が流れ込んできて、その衝撃は大きかった。むしろむずかしい音楽に惹かれるような所があった。

とかく我々は一足飛びに極めつけにかじりつくクセがあるが、私のもそれであろう。夢中になってジャズを聴いて、難しければ難しいほど頭にじかに入ってくる予感があった。時間がたってみると、それも懐かしさに代わってくるから、ムリはしてみるものであるが。

現代音楽も難しい音楽の代表みたいにいわれる。その実、何百年も昔の音楽を思い描くより、フランスの詩人シュペルヴィエイユがいうような、腕も脚ももぎ取れた地球を想像するほうがよほど容易いのではないだろうか。滅亡を思わせるような災害が起こり、音楽を破壊するような現代音楽がかき鳴らされれば、そっちの方が身近に感じるだろう。

極めつけは確かに極めつけだろう。そろそろ時節柄だが、例えばベートーベンの第九など、あんなに難しいものはめったに知らなくても良いような気がすることも

確かである。一年のけりをつけるには都合がいいけれど、もう少しやさしい隣の交響曲でも、年越しには打ってつけなのではないか。

ベートーベンで思い出したが、最近、知人に頼まれてルドルフ大公の室内楽の合わせに行ってきた。ルドルフ大公といえば、ベートーベンが数々の大作を献呈した人物としてわが国でも名が通っているが、自身でも作曲をした。

弾いていて、いたるところでひねってあり、しかもそれが謙虚に痕跡をとどめている所が愉快だった。メロディーもそうなら、転調も面白く、伴奏も奇抜だった。

曖昧な記憶では、私がヨーローッパに留学中は、名前も聞いた事がないような作曲家、ハイドン的な音楽や、モーツァルト的な音楽や、もっと古いものも星の数ほど弾かされたものであった。室内楽だったり、チェロのオリジナルだったり、教会音楽だったり。技術的に難しいものもあり、はっとするような美しいメロディーに遭遇することもあった。

そんな中でルドルフ大公の曲には接した事がなかったから、私は一人で喜んで練習から帰ってきた。道々、ルドルフ大公のように、作曲家に意欲満々なのがいるから、演奏家は素透しの方がいいかと思った。無一物の如く。

ルドルフ大公はベートーベンに作曲の教えを乞うていたというから、ベートーベンの困惑した顔まで見える気がした。いろいろ専門的なアドバイスを受けていたらしい。気張らない音楽も毎日の暮らしにはいいかもしれないと改めて思ったのである。

夜、雨音を聞きながら、久しぶりにスカルラッティのチェンバロソナタを聞いた。全集の後ろに付録のように室内楽曲が入っているが、それが、また溜飲が下がるような曲である。ヴァイオリンとオーボエはほとんどユニゾンで、チェロとバスーンもユニゾン。それにチェンバロの通奏低音が付いているだけの簡単な作りで、そこが心地よい。

ハイドンのピアノトリオのように。ハイドンにはピアノトリオが数十曲あるが、初期はチェンバロと弦楽器で、むかし順番に弾いてみた事があった。みなどれも美しいと思った。楽しい記憶である。

それはそうと、スカルラッティのCD、アンサンブルの演奏者はみな上手じゃないか！と思う。付録とはいえ、いい音楽を聞いた気がした。

（やすだ・けんいちろう　本会　弦楽部会長）

特集；芸術と福祉活動（1）

# アフリカ支援から学ぶ

ピアノ　八木 宏子

ケニアの孤児を救うチャリティーコンサートを長年継続して来ている。
きっかけは、主人の赴任地に旅人としてケニアへ出かけた折り、たまたま日本人学校から頼まれて、即席のコンサートを行った。ナイロビではほとんどコンサートがない新鮮味からか、子ども達は楽しかったらしく、反響が父兄に伝わり、次ぎはPTAからの希望が出て、帰国前日に同じプログラムで大人用のお話に変えて開催。この旅先で役立ったことが私の大きな喜びとなった。

ケニアに在住の岸田袈裟さんが「あなた、ケニアでチャリティーコンサートをやるといいわよ」と勧めてくれた。彼女が現地を準備し、私が日本からプログラムを準備する。88鍵鳴るピアノがあればよしとする最低条件で、どれだけ人を救えるかが始まった。もちろんナイロビではグランドピアノがあるフレンチカルチャーセンターとナショナルシアターの２つのホールがあるが、岸田さんはどんどん企画を拡大していく人で、毎年フレンチカルチャーセンター公演後は地方巡業となって行った。1984年から1990年まで（1990年は嶋田美佐子さんが参加、音舞会声楽部会会員）ほぼ毎年の各都市巡りの珍道中は、以前「音楽の世界」の“ケニア日記”ですでに発表済み。

現地で開くチャリティーコンサートについては、旅費を節約して募金に換えた方がよいという意見があった。現地での生々しい国際交流は、人間同士が自然に感じる感動がある。コンサートでケニアの子ども達と山田耕筰の「赤とんぼ」を一緒に日本語で歌ったとき、肌の色の違うもの同士が同じ言葉で歌い、ゾクゾクとした戦慄を覚えた。音楽に国境はなく、人種が違っても共演することで自然に融合を図り、幸せを醸し出す。バレンボイムがユダヤ人とパレスチナ人によるオーケストラで融和を図っている。チョン・ミュンフンが北朝鮮と韓国との音楽による和を考えている。人種を超えて和が生まれる感激的情況は、同時に聴衆へも伝わる。国々の付き合いも文化交流で効果を表す。1985年、国際婦人年会議を契機に設立した我々の救援組織、ＮＰＯ法人「少年ケニヤの友」の活動に、心の届く救援として熟成したので、私の現地体験は旅費の節約より大事なことであったと思われる。

太田恵美子さん（音舞会ピアノ部会会員）提唱の日本でのチャリティーコンサートは、1999年に始まり、ほぼ毎年開き、2010年まで９回開催｛於：調布市グリーン

ホール（小）｝。2005 年からは多摩アフリカセンター（アフリカに関連した文化芸術及び科学技術の振興を目的に活動するＮＧＯ。代表八木繁実　副代表八木宏子）の助成を得て、アフリカン・ミュージシャンをゲストに招き、異文化理解を兼ねる異色のコンサートを開いている。ケニアの子ども達に奨学金を、という目的にアフリカの音楽家にも賛同して貰い、前半をクラッシックで、後半はアフリカの音楽というプログラムである。

外務省主催のアフリカンフェスタは、毎年２日間に渡って賑やかに大々的に開かれている。アフリカ各国の大使館も参加し、NPO、NGO など、各組織が活動を披露し、支援援助国の品々も販売している。アフリカン・ミュージシャンの演奏もあり、無料で聞ける。アフリカにやって来た気分になり、異国の雰囲気に満ちている。アフリカ人気も徐々に高まって来ている。最近は横浜の広々とした赤レンガ倉庫で開かれているが、以前の日比谷公園での時、野外ステージで深紅のドレスの歌手がコラの伴奏で歌っていた。即座に「これはすばらしい！」、と急いで主人を呼びに行った。「すごいわよ」と。ぜひともこの２人に我が会で演奏してもらいたい！それが後述の 2005 年、09 年に実現したニャマ・カンテさん（歌手）とママドゥ・ドゥンビアさん（コラ奏者、コラはアフリカンハープとも呼ばれる）であった。アフリカン･ミュージシャンの人選については､出来るだけ全員アフリカの人を選んでいる。日本人とアフリカ人のリズムの質が違う。アフリカの人のリズムは躍動感があり、生き生きとした弾力性がある｡例を挙げるとケニア人が陸上競技で活躍しているが、ケニア人の長距離走の走り方に、リズムを体でとらえている様子がわかる。ドラムの叩き方でも体にのったリズムとなる。アフリカ音楽には必ずと言っていいほどパーカッションが付きものである。昨秋、身体障害者のグループ、ベンダ・ビリリがコンゴ民主共和国から日本にやって来た。ＴＶを通して見ていたが、すごいシャープなリズムで圧倒された。カウンターのあるレストランでコップ、お皿をばち代わりの箸で叩き、魔ものが潜んでいるかのような爆発的なリズムを生みだした。音楽には人間の心の動き、息づく気配の静けさが美となる場合と、魔物が巣くっているかのような強烈な動物的なリズムが不気味な魅力となる場合がある｡とにかく､人々を元気にさせる、魅力のあるアフリカ音楽をコンサートで紹介しようと言うわけである。

今まで出演願ったアフリカのゲスト（敬称略）は、2005 年：ギニア出身のグリオ（語り部）の血を引く歌手でダンサーのニャマ・カンテを中心のグループ。ジェンベなどのパーカッションが入る。06 年：ガーナ出身のオスマン・オランド・ビングル率いるアルヘリのグループ。トーキングドラム、ガンガ、ドゥンドゥンなどのパ

ーカッションが入る。07 年：ムビラ（親指ピアノ）で有名な国、ジンバブエ出身のサジ・マランガの独演。08 年：再度ニャマ・カンテ＆ジェリドンのグループ。09 年：マリ共和国出身のコラ奏者、ママドゥ・ドゥンビアのグループ。ドゥンドゥン、ジェンベのパーカッションが入る（写真）。10 年：ムクナ・チャカトゥンバ率いる５人のアフリカン・ミュージシャン（コンゴ３人、タンザニア１人、マラウィ１人）によるリンガラ音楽（コンゴ、元ザイールのリンガラ語による音楽。ブラックアフリカに広がっている）。ギター、キーボード、スモールパーカッション、ダンサーが入る。

アフリカ音楽はなかなか好評で、感想を披露すると、09 年開催のコラ演奏グループへは「コラ、アフリカンハープがとてもすばらしかった！　アフリカの川、アフリカの湖、アフリカの流れが僕の心にしぶきを吹き上げました。アフリカのパーカッションがそれを強く押し上げ、押し広げました。僕の同行者も随分喜んでくれましたよ」。10 年開催の会では、ダンサーの指導も入り、88 才のおばあさま「今日は娘に連れられて来ましたが、アフリカからエネルギーをもらいました」、「今、家の子は赤ん坊だが、もう少し大きくなったらぜひ連れて来たい」と。

コンサートの目的は（１）アフリカの異文化理解を深めながら国境のないさまざまな音楽でケニアの子ども達に支援を送る。（２）チケット価格を低く抑え（2500

円）音楽普及を考える。とくに好奇心旺盛な小学低学年生にはアフリカの強烈なリズムを体験することで、よい影響となるよう、入場料は無料とする。（３）アフリカ関係の書籍、ケニア紅茶、アクセサリー等のアフリカ産品を販売し募金に加えると共に、アフリカを身近に感じてもらう。

プログラムの選曲は、太田さんは以前管楽器とのアンサンブルをやっていたが、最近は独奏曲からポピュラーなものを選曲している。私が心掛けているのは、最近は室内楽曲に関心があるので、その中から名曲を選んでいる。モーツァルト　ヴァイオリンソナタ K. 378、　ベートーヴェン スプリングソナタ、ベートーヴェン チェロソナタ第３番、ブラームス ヴァイオリンソナタ第３番などを発表した。名曲は深いものがあり、私にとっていい勉強である。聴衆にも楽しんで頂けたと思う。

2010 年開催コンサートの会計内訳

前売り券：141　当日券：58　チケット販売数：199　当日入場者：191

必要経費：25,0925 円　　募金額：382,995 円

2010 年に初めて調布市と調布市教育委員会の後援を取り付けた。調布市にポスターで宣伝してもらえた。出来るだけ聴衆を増やしたいため四苦八苦している。

長年「少年ケニヤの友」の副理事長であった岸田袈裟さんが 2010 年 2 月 23 日に 66 才で逝去、2010 年 11 月 5 日のチャリティーコンサートは追悼演奏会となった。太田さんがショパンの「葬送行進曲」、私はリストの「慰め」第３番を弾き、岸田さんを偲ぶコンサーが始まった。ケニアで岸田さんにお世話になった方々も遠くからお出でになった。岸田袈裟さんはケニアの孤児ばかりでなく、ケニアに訪れた多くの日本人の人々のお世話をした人だった。アフリカは厳しい世界である。困った問題に出会うことが多かったのである。――――ある方は「涙になるから早々に失礼する」と。――――

彼女はアイディアがよく、実行力がある。行動的で、多くの人々に影響を与えた。心温かく、個性的で、しかし深紅のバラの如く華やかではあるが刺もあった。人間臭く、魅力がある人だった。今でも度々彼女の話は話題にのぼる。惜しい人を若くして亡くしたことは本当に残念だった。

会に大穴が開いた感がある。しかしアフリカは存在する。アフリカは多くの問題を抱えている。力及ばずながら今後細々でもアフリカと関わって行こうと思います。

（やぎ　ひろこ　本会　ピアノ会員）

芸術と福祉活動（２）

# あなたに一輪の音楽を

声楽　浦 富美

今からかれこれ 20 年近く前、コーラスの伴奏者でもある友人のピアニストに誘われて茨城県土浦市にある、或る知的障碍者の授産施設に歌の指導に通い始めたのが、私のボランティア活動の始まりでした。

それまで私はボランティアの経験もなく、知的障碍を持っている方と接する機会もあまりなく、果して私に務まるだろうか、と一抹の不安を持っていました。
私の住む我孫子市から電車と車で約１時間半、筑波山の麓の、畑や田んぼや林に囲まれたのどかな田園風景の中にその施設はありました。

一歩門をくぐったその瞬間、初めて会う園生たちが明るく大きな声で「こんにちは！おはようございます！」と一斉に声をかけて出迎えてくれた事は、20 年近く経った今でも忘れられません。私の持っていた不安は何処かに吹っ飛んでいってしまいました。それから約 20 年、毎月１回ですが、ほとんど休むことなく通い続けています。

ここまで続けてこられたのは何故だろうか？と自分自身に問いかけてみると、「みんなの笑顔に会いたくて」通い続けてきたのだと思います。いつもその施設には素敵な笑顔がいっぱいあります。行く度、やさしさや勇気をもらえるように思います。みんな夫々様々な障碍を持っていますが、自分より弱い立場の人が困っていると、誰に言われるわけではなくサッと手を貸してあげます。そんな素敵な方たちです。普段はお仕事をする場ですが、月に一度、文字指導やちぎり絵、絵手紙の指導とともに歌唱指導の時間もあります。


音楽現代

2011 年 12 月号　定価 840 円

このたびの東日本大震災の犠牲になられた方々に深く哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様に心からのお見舞いを申し上げます。一日も早い復興をお祈り申し上げます。

♪特集　名演奏家の「おはこ」～往年の名指揮者篇／
　　24 人の指揮者お得意の作曲・作品は？
♪特別企画１　恒例！ 音楽界ゆく年くる年
♪特別企画２　今年のベートーヴェン「第九」
　　公演情報
♪カラー口絵
・バイエルン国立歌劇場日本公演
「ロベルト・デヴェリュー」、「ローエングリン」
「ナクソス島のアリアドネ」
・関西二期会「フィガロの結婚」
・あらかわバイロイト「神々の黄昏」
・ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団日本公演
♪インタビュー
ロベルト・フロンターリ　小松長生　北川暁子
津留崎直紀　奈良ゆみ　他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11
TOMY ビル 3F

みんなで季節の歌や、昔の童謡・唱歌、そしてアニメソング、歌謡曲に至るまで約１時間半元気に歌っています。中には声を出せない方もいますし、文字を読むのが得意でない方もいます。「指導」というよりは、とにかく楽しく歌おう！をモットーに、大きな声で、手拍子をとったり、簡単なステップを入れたり、グループで歌ったり、一人で歌ったり・・・あっという間に１時間半過ぎてしまいます。ピアニストの友人の指導でハンドベルを練習したり、和太鼓を打ったり、楽しい時間を過ごします。年に一度、園のお祭りで日ごろの成果を発表します。

以前は二人で通う事がほとんどでしたが、ここ数年は協力してくれる音楽仲間達も加わって更に賑やかにパワーアップして歌っています。車窓からの景色の移り変わりを楽しみながらの筑波への道のりは、毎月待ち遠しく、これからも身体が続く限り、続けていきたいと思っています。

**お年寄りとの歌の交流について**

デイサービスのみなさんと　中央奥が筆者

私が、いちばん私らしくお手伝いできることとして、お年寄りとの歌の交流があります。我孫子市内のデイケア（通所リハビリテーション）＆デイサービス（通所介護）での歌のボランティアも随分長く続けています。最初は一箇所でしたが、頼

まれたら断れない良い性格が災いして（幸いして？）今では市内5箇所の施設を巡っています。それも月に2度ずつおじゃましていますので、一ヶ月10日間（日に2回という日もありますので、実際は少し少ないかもしれません）巡っている事になります。

こちらも何故こんなに長く続けてこられたのでしょうか？それは、やはり楽しみに待っていて下さるお年寄りがいて下さるから、それを励みに通い続けて来たように思います。もっと自分の気持ちに正直になるなら、私の気持ちの根底に、亡くなった両親への想いがあるのかもしれません。高知から東京の音楽大学にきっと苦労して通わせてくれたのに、卒業してたった2年で結婚、主人の単身赴任と子育てを言い訳に、勉強もせず、音楽活動もせず、育児に専念していた私をずっと遠くから見守り続けてくれた両親に、何もしてあげられなかった後悔の念が、私をボランティア活動へと導いていってくれたのかもしれません。私が歌うことで少しでもお年寄りが喜んで下されば、両親も喜んでくれるかもしれない・・・そんな気持ちもあるかもしれません。こう書いてくると、とても大変なことをやっているように思われそうですが、実際は月2回、みんなで楽しく歌おう！と私自身がいちばん楽しんで歌っているだけかもしれません。こちらの施設では本当に懐かしい明治、大正、昭和の童謡・唱歌・歌謡曲を中心に歌っています。ただ歌うだけでなく、その歌の作られた背景など私が知っている事を交えながら進めていきます。お年寄りと歌っていていつも感じることは、幼い頃にかえったように、とても良い表情で、心の底から楽しんで歌っている・・・そんな様子を見ていると、私のほうまで幸せな気持ちになり時間の経つのも忘れてしまいます。

皆さんも幼い頃を思い出され、色々昔のお話に花が咲き、それがどんどん広がっていったり、と話は尽きません。歌にはそんな不思議な力もあるようです。ご病気の後遺症で話すのも困難な方もいらっしゃいます。懐かしい童謡や唱歌に涙ぐまれることもあります。

いつもは大体私一人で伺っていますが、年に何度か音楽仲間とミニコンサートも行なっています。普段なかなか音楽会に行く機会もないと思いますので、生の音楽にふれて欲しいと企画しています。

デイケア＆デイサービスでの歌のボランティアはこれからも続けていきたいと思います。大勢の素晴しい人生の大先輩から、目に見えない貴重な宝物を沢山いただいています。さあ、次は何の歌を歌いましょうか。

## チャレンジド・ミュージカルについて。

2012年2月12日（日）市川市市民会館ホール、2月18日（土）千葉県文化会館大ホールに於いて、チャレンジド・ミュージカルⅦ「LEO NI LEO ～今日は私の日 ～」

【主催：NPO 法人いちかわ市民文化ネットワーク（いちぶんネット）】が上演されます。

『サバンナ２』カーテンコール

「障がいのある人もない人も、子どもも大人も、一緒に楽しく面白いことをしよう！障がいのある人（チャレンジド）を真ん中にミュージカルを楽しもう！」と 2005 年 12 月に誕生したこのチャレンジド・ミュージカルも今回で 7 回目となります。9 月末より毎週末、小さな子どもさんから大人までチャレンジドさんを真ん中に生き生きと熱い練習が続いています。一人一人の「良いとこ」を引き出してステージで輝いて欲しい！！と、スタッフ一同頑張っています。制作・演出を担当するのは NPO 代表理事の吉原廣さん。吉原さんの面白い台本を手にみんな一生懸命練習しています。

本会声楽部会会員の渡辺裕子さんと共に歌唱指導を担当しています。作曲は本会賛助会員の島筒英夫さんです。全曲島筒さんのオリジナル曲で、歌だけでも約 25 曲あります。島筒さんは 2 歳の時、ご病気によって失明された全盲の作曲家ですので、渡辺さんと島筒さんと 3 人で、音楽ソフト Finale を使って楽譜の作成から始めました。沢山の素敵な曲が誕生しました。

毎週末頑張って練習していますので皆様是非ご来場下さいますようご案内させていただきます。どうぞ皆さまのあたたかい応援をよろしくお願い致します。

| | |
|---|---|
| 市川市公演 | 2012 年 2 月 12 日（日）　ステージ 1　11：00　　ステージ 2　15：00 |
| | 市川市市民会館ホール（TEL　047-335-1542） |
| 千葉市公演 | 2012 年 2 月 18 日（土）　14：00 |
| | 千葉県文化会館大ホール（TEL 043-222-0201） |
| 入場料 | 一般：1,500 円（当日券：1,800 円） |
| | 4 歳～学生、障がい者：1000 円（当日券：1,200 円） |
| お問い合わせ＆お申込み | NPO 法人いちかわ市民文化ネットワーク（いちぶんネット） |
| | TEL　047-339-7809　　FAX　047-339-7810 |

（うら　ふみ　声楽部会員）

芸術と福祉活動（３）

# 『緑の風』、『緑風舎』訪問記

編集部

戸引小夜子さん、浦富美さんと私の三人で、「社会福祉法人緑の風」と「緑風舎」を訪問したのは、８ 月 31 日のことでした。私は、昨年 10 月 3-4 日にリゾナーレ音楽祭に御招待戴いた折、同施設を見学させていただきましたので、今回が二度目の訪問でした。

武田七七子さんが小淵沢駅まで迎えに来て下さり、専用の車で、まず社会福祉法人「緑の風」に向かいました。「緑の風」、「緑風舎」は、障碍者が置き去りになる社会があってはならない。障碍のある人も健常者も、豊かな自然に囲まれた環境のもとでともに過ごす空間をつくりたいという、武田ご夫妻の強い願いのもとで、農業生産法人「緑風舎」が１４年前、障碍者支援施設「緑の風」が８年前に設立されたということです。農業と福祉を二本柱としたこのプロジェクトを立ち上げた経緯につきましては、『音楽の世界』2010 年 12 月号掲載の武田和久氏の文章『八ヶ岳南麓、長坂に緑の風を吹かせよう』をお読みいただきたいと存じます。

「緑風舎」、「緑の風」の案内板

武田和久氏は「我が国での障碍者に対する理解はまだ途上にある」と書いておられますが、私などもその類のようで、最初に施設を見学した際、働いている障碍者の方々とお話したいと考えていたのですが、それは、とんだ思い上がりで、相手の方の障碍の内容をよく理解した上で、コミュニケーションしないと、相手を混乱させたりして、心理的ダメージを与えてしまいかねないということでした。

武田和久氏とお話した際、私個人にとっても関心が高い、ベートーヴェンとビル・ゲイツが話題になり、それは、とても興味深いものでした。両者とも発達障碍だということなのです。それで、家に帰って調べてみると、二人ともアスペルガー症候群（発達障碍の一種）という障碍を持っていたということらしいのです。症状を調べてみると、私自身にも、いくらかそのような傾向があるような気がして来ました。もともと人間は、健常者、障碍者の二つに線引きすることなど出来るものではないでしょう。身体の病のことだと、「実は私は血圧が高いのです」、「いやあ、私には痛風の持病がありましてね」、「そうですか、お互いに健康に気を付けて頑張りましょう」というように、お互いに弱みを見せ合うことで、かえって親近感が増したりします。ところが、心の病のこととなると、両親が我が子の障碍をひた隠しにしたりし

て、結果的に子供の症状を悪化させたりしてしまいがちです。身体が病むように、心が病むことなど珍しいことでも、また、恥ずかしいことでもないのだと思います。相手を同情の目で見すぎるのはよくないし、ましては、卑下の目で見つめるなど、とんでもないことでしょう。

緑の風センター内に設置された製粉機
各々の障碍者の方は、全ての工程の中で、それぞれに向いた仕事を担当する。

ここで、あらためで芸術の世界について思い巡らしてみると、様々なタイプの心の病をもった人で溢れているように見えます。ここはまさに、健常者、障碍者の境界線がはっきりしない世界で、優れたもの、人に感動を与えてくれるものは、分け隔てなく評価されます。

障碍者が置き去りにすることなく、ともに共生する社会とは、目先の経済効率だけに目を奪われる社会ではなく、人間の多様性を知り、人間の様々な能力、可能性を理解し、それを生かす工夫をして行ける社会ではないかと考えます。

武田七七子さんと「文化活動も福祉活動も、禿げ山に一本一本樹を植えて行くように根気と忍耐を必要とすることですね」などと、意見交換したことがあります。

障碍者が手作りしたクッキー（センター内で購入できる）

私なんぞは、「我が国の文化環境の向上のため」などと、つい柄にもなく力んでしまい勝ちになるのですが、武田ご夫妻のご様子をみていると、不自然な気負が感じられず、農場で育つ花々を慈しみ、楽しそうにしておられました。ご夫妻のそのような姿勢に周囲の人々は親しみを感じ、協力者が増えて行くのでしょう。

今回は八ヶ岳山麓の美しい自然と、可憐な花々を眺め、美味しいご馳走をいただき、楽しい旅となりましたが、その一方、福祉のことについて、自分の勉強不足を感ずる旅でもありました。

「緑の風」、「緑風舎」につきましては、戸引さん、浦さんがより鮮明に書かれておりますので、お読み下さい。　（中島 洋一〈作曲〉 本誌編集長）

いつの事だったろうか。「麦の会」（ハンディキャップを持っている人を支援する団体、武田和久・七七子さんが立ち上げたもの）のチャリティ・コンサートに行くようになったのは、深沢代表理事に紹介して頂き、武田さんに当会（日本音楽舞踊会議）への寄付をお願いした年の1１月に行った時からだろうか。

「緑風舎」蘭農場内の蘭の花

そのコンサートの受付には「緑の風」の施設で作られたパンジーの花や、パン・クッキーの数々が並べられ、訪れた人の人気を集めていた。私もパンジーの鉢を買い、家の庭に置いていたが、春先までよく咲いてくれたのを覚えている。

その「緑の風」の本拠地である八ヶ岳南麓への訪問が実現し、武田さんにお世話になりつつ、広い施設を見せて頂いた。パンを作っている所では、粉を挽く機械まであり、パンの美味しさに納得した。花の栽培もいくつものハウスで作られていました。一方武田さんご夫妻は蘭にも興味を持っており、特に蘭を作っている所には、普通より小さく沢山の花をつける胡蝶蘭が白・ピンク・オレンジと色鮮やかであった。その中には、丁度武田七七子さんと同じ名前の「ナナコ・エンジェル」という白い種類がハウスいっぱいに並んでいるのには圧倒された。　毎朝バスに乗ってハンディを持った若い人達がこの施設に来て、夕方まで花を世話したり、パンを焼いたりの作業をしていくのだそうだが、この様な自然の中での毎日は、私達にも理想郷である様に思える。

玄関に飾られた蘭の花（ナナコ・エンジェルと思われる）

（戸引 小夜子〈ピアノ〉本会理事長）

以前より「緑の風」の事は中島先生や「麦の会チャリティコンサート」そして「ホームページ」などを通して伺っていたので、いつか機会があれば是非見学させて頂きたいと思い続けていました。今夏、中島先生よりお誘いを受けて、理事長と共に初めて訪問させて頂きました。私も約 20 年前より茨城県の知的障碍者の授産施設で歌の指導をしていることもあって、HP で拝見する「緑の風」を実際に訪ねてみたいと楽しみに伺いました。訪ねてみて、私の想像以上に広大な自然の中、八ヶ岳の麓に「緑の風」はありました。こんなに恵まれた環境の中でお仕事をされている利用者さんは本当に幸せ!！それが私の第一印象でした。武田様ご夫妻にご案内していただいて館内、そしてお花を栽培しているハウス、を見せていただきました。館内では美味しいパンやクッキーの製造販売、そして外にあるハウスでは一人の女性の利用者さんが黙々と、こつこつと小さなサボテンの鉢を、小さな小さなピンセットを使って作業していました。本当に一生懸命な姿が印象的でした。また、緑風舎のお花を栽培しているハウスでは、就労支援として元利用者さんの一人の青年が、ラジオで音楽を流しながら作業をしていました。その青年の何ともいえない素敵な笑顔が忘れられません。

センターで働く人（草刈り）

自然がいっぱいの恵まれた環境の中、生き生きと仕事をされている利用者さんの姿に心打たれる思いでした。武田様ご夫妻の温かいお人柄にふれた一日でもありました。ご夫妻の熱意が全てのスタッフ、利用者さんに伝わって活気ある毎日を送っているのだと改めて思いました。心がぽっと温かくなる素敵な一日でした。

（浦富美〈声楽〉本会事務局次長）

次ページに掲載したプログラムは、社会福祉法人『緑の風』を支援するチャリティ・コンサートのものです。主催団体は緑の風後援会の『麦の会』です。毎年、音楽的に質の高い演奏を提供し、クラシックファンを堪能させています。『緑の風』の福祉活動と、『麦の会』を中心とした芸術文化活動は、太い絆で結ばれています。（中島洋一）

社会福祉法人 緑の風 を支援する

# チャリティーコンサート

W.A.モーツァルト ピアノ三重奏曲 変ホ長調 K.498
「ケーゲルシュタット・トリオ」
ピアノ・深沢 亮子
クラリネット・四戸 世紀
ヴィオラ・清岡 正子

助川 敏弥 「Gismonda」(2010-2011: 初演)
ピアノ独奏・深沢 亮子

---------- ♪ ----------

A.ヴィヴァルディ ヴァイオリン協奏曲「和声と創意への試み」作品８より
「四季」全曲
ヴァイオリン独奏・岡山 潔
カンマーオーケストラ 緑の風

12月10日(土)
14:30 開演(14:00 開場)
千駄ヶ谷 津田ホール

チケット料金：￥5,000
(学生￥3,000)

懇親会
16:45～
ユーハイム
(津田ホール地下１階)
￥3,000

主催：緑の風後援会 麦の会 問合せ:TEL 03-3556-3056(麦の会事務局)

# 出演者のプロフィール

## 深沢亮子（ピアノ）

15 歳のとき第 22 回日本音楽コンクールで首位受賞。17 歳でウィーン国立音楽大学に留学、1959 年同校を首席で卒業。翌年ウィーン楽友協会ブラームス・ザールにて海外デビューリサイタルを開催し、絶賛される。1961 年ジュネーブ国際音楽コンクール最高位入賞（1 位なしの 2 位）。以来、ヨーロッパの諸都市や南米、アジアの主要都市でリサイタルや室内楽、オーケストラとの共演等国際的な舞台で活躍。（共演した指揮者は L.v.マタチッチ、G.ヴァント、小沢征爾他。オーケストラはN響、東響、N.O.、トーンキュンストラー管弦楽団、読売日本交響楽団他。室内楽は新・旧ウィーン八重奏団他。）日本の作品も内外に数多く紹介する。また、度々ウィーンのベートーヴェン国際ピアノコンクール、日本音楽コンクール他の審査委員を務める。著書、CD 多数。日本音楽舞踊会議代表理事（The Conference of Music and Dance, Japan）。1963 年大阪府民劇場奨励賞。1995 年千葉県文化功労者。師・永井進、G.Hinterhofer。

## 四戸世紀（クラリネット）

1974 年東京藝術大学卒業後、ベルリンへ留学。H.v.カラヤン氏にベルリン・フィル アカデミーへの入学を許可され、クラリネットをカール・ライスター氏に師事。ベルリン・フィル定期公演、ザルツブルグ音楽祭に参加。その後ハンブルクで行われた、第一回国際ブラームス・コンクールにて部門別優勝。北西ドイツ・フィル、ベルリン交響楽団首席奏者として、ドイツに 20 年滞在。1995 年帰国。読売日本交響楽団首席奏者として 2011 年 3 月まで在籍。現在東京音楽大学客員教授として後進の指導にあたる。ソリスト、室内楽奏者としての活動も多く、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル メンバーとの共演を始め、近年はトッパンホール アンサンブルシリーズ公演、CD 録音でも好評を博している。

## 清岡正子（ヴィオラ）

東京藝術大学卒業。在学中に安宅賞を受賞。東京都交響楽団に入団。読売新人演奏会、日演連新人演奏会に出演。1976 年ベルリンへ芸術大学に留学。にベルリン・フィル第一コンサートマスター、トーマス・ブランディス氏に師事。ベルリンを中心にソリスト・室内楽奏者として活躍。ベルリン・フィル チェロ奏者ディートマル・シュヴァルケ氏率いるダーレット弦楽四重奏団では第一ヴァイオリンをつとめる。1981 年セルジュ・チェリビダッケ率いるミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の第一ヴァイオリン奏者として入団。現在に至る。セルジュ・チェリビダッケ、ミュンヘン・フィルによる DVD シリーズ、ミュンヘン・フィル室内楽シリーズに定期的に参加し、高い評価を得ている。

## カンマーオーケストラ 緑の風

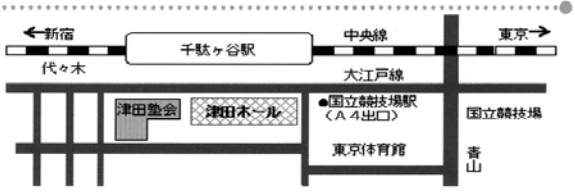
コンサートマスター岡山 潔を中心に、社会福祉法人「緑の風」の活動に賛同する音楽家たち、および、基金緑の風が支援する「リゾナーレ室内楽セミナー」などで研鑽を積んだ若手演奏家たちによって編成された室内オーケストラ。2003 年から毎年開催されている麦の会主催のチャリティー・コンサートに出演し、その若々しく溌剌とした演奏で大変好評を得ている。

### 岡山潔（ヴァイオリン）

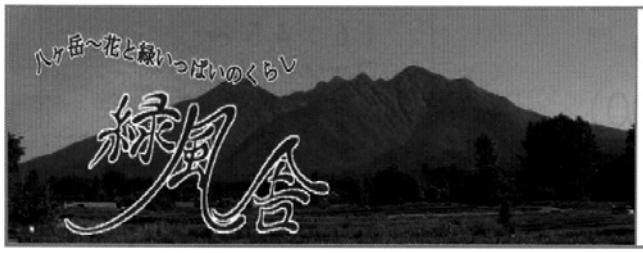
東京藝術大学大学院修了。1968 年ドイツ政府給費生としてハンブルグ音楽大学留学。1970 年ベルリンにてメンデルスゾーンコンクール「弦楽四重奏の部」第 1 位。1970 年ベルギーのブリュッセルにてイザイ・メダル受賞。1971 年から 13 年間ドイツのボン市ベートーヴェンハレ管弦楽団第1コンサートマスターを務め、ヨーロッパ主要都市で独奏と室内楽活動を行い、1984 年にドイツ政府から文化面での貢献に対し功労十字勲章を授与される。同年帰国。読売日本交響楽団第一コンサートマスターとして 7 年間活躍。1993~2006 年エレオノーレ弦楽四重奏団を主宰し、ベートーヴェンシリーズを中心に日本とヨーロッパで活動。2008 年より岡山 潔 弦楽四重奏団を主宰。1990 年より 2010 年まで東京藝術大学教授、現在、同大学名誉教授。2011 年、若手演奏家の育成と支援を目的とした TAMA 音楽フォーラムを設立、その代表を務める。

## 津田ホール

〒151-0051　渋谷区千駄ヶ谷 1-18-24
TEL　03-3402-1851
JR 線：千駄ヶ谷駅下車
地下鉄都営大江戸線：国立競技場駅下車








農業生産法人 （有）緑風舎

八ヶ岳南麓で花作りを通じて心豊かな生活と
職場環境の創造を目指しています

〒408-0032　山梨県北杜市長坂町大井ヶ森 994-5
TEL　0551-20-4377　　FAX　0551-20-4378
http://www.ryokufusha.com

## 連載　音・雑記－ひなの里通信　(43)　狭間 壮

### 「故郷」への感慨

コンサートを頼まれる。子ども向けのものもあれば、デイケアの施設に通う高齢者向けに、などいろいろ。主催・担当者とプログラムやその他の打ち合せをする。

このごろ多いプログラムへの希望曲目がある。「上を向いて歩こう」と「見上げてごらん夜の星を」の2曲だ。しかも一緒に歌いたいとの要望である。2曲とも坂本九によってヒットした50年近くも前の歌。

この2曲のリクエストは、東日本大震災のあと被災地のコンサートで多く歌われ、マスコミによってとりあげられる機会が多かったからだろうか。

親しみやすいメロディーであることはもちろんだけれど、詞の内容に共鳴することも多いのだと思う。その上、飛行機事故で悲劇的な最期を遂げ伝説になった、坂本九への哀惜もそれに重ねて。

安直に「癒し」という言葉を使いたくないが、東日本大震災の後、その傷口に深さの違いはあっても、日本中が「癒し」のそれを求めているかのようだ。直接の被災者でない私でさえ、やり場のない憂鬱をもてあますことがあるのだから。

この歌をみんなで歌ったところで、何になろう。被災地への直接支援になる訳でもない。でも歌って泣きたいのだ。それが被災地への被災者の気持に寄りそう術（すべ）のせめてもの一つとして。

今日もホールいっぱいの50年前の少年少女達が、涙をため「上を向いて歩こう」と声を合せる。養老施設でのコンサートである。

会場も参加して歌う曲の定番は、今までは「故郷」と「赤とんぼ」であった。いずれも郷愁をさそう名歌である。季節が秋であれば「赤とんぼ」は特にはずせない。この2曲に先の2曲が足されることが多くなったのだ。

「故郷」「絆」「思い出」などにかかわることがらは、今まで以上にプログラム構成の大事な鍵となってきた。震災を経験して、つくづく再認識させられた思いだからだ。異を唱えるつもりは全くない。

「ふるさとは遠きにありて思ふもの／そして悲しくうたふもの」と詩った犀星、「石を持て追わるるごとくふるさとを」後にした啄木、そして「いづれの日にか国に帰らむ」と漂泊の旅人に望郷の想いを重ねた藤村も、「志を果していつの日にか帰らん」と詩った高野辰之など、望郷の念は多くの詩人によって詩われている。

それは、まっすぐの情であったり、屈折したものであったり、様々だ。しかしいずれもが、産土（うぶすな）への絆の抗いがたい感情、その表出であることに変りはない。

そんな「故郷」をしのぶ歌がプログラムを多くうめる。愛馬との別離の情を詩う三橋美智也のヒット曲「達者でナ」などをリクエストされることもある。

高村光太郎の「智恵子抄」が発刊されて、今年は70年だ。10代の終りに私も読んだ。

読むべき一冊として、通過儀礼のように。ごく一部をのぞいて理解のできない世界であった。

それでも鮮明に覚えているフレーズがある。「あどけない話」という一編の中にある「智恵子は東京に空が無いといふ」、それだ。

「ほんとの空が見たいといふ」と続く。光太郎は、驚いて空を見るのだが、私も思わず空を見上げたのだった。当時、私は東京の新宿で暮していた。

「阿多多羅山の山の上に／毎日出てゐる青い空が」智恵子にとっての「ほんとの空」だというのだ。

ほんとの空のある阿多多羅山（安達太良山・あだたらやま）の里二本松は、智恵子の故郷である。造り酒屋の長女として明治19年に誕生した。

その生家には手が入れられて、智恵子の記念館の一部になっているとのことだ。二本松市のイメージアップ（町おこし）に一役買ってもらう、のつもりからである。

そして、二本松市はそのキャッチフレーズを、「ほんとの空のある街」とした。智恵子の「あどけない話」にヒントを得てのことだ。

智恵子のほんとの空があった二本松市は、福島原発から約60㎞圏内。標高1700メートルの安達太良山も、その里も、原発の爆発による放射線で汚染されてしまった。風にのり安達太良山を越え遠く北海道まで届いたのだから、「ほんとの空」は二本松だけでなく、もう日本中どこにものぞめないのかもしれない。

先日、上高地の麓の波田中学校で演奏付きの講演をした。生徒450名とその父兄150名ほどを前にして。「故郷」を講演の最後に一緒に歌いたいとのリクエストがあった。

くったくなく笑顔で一緒に歌う生徒たちの明るい声に、私は思わず胸がつまる。「山は青きふるさと／水は清きふるさと」、未来を信じ育っていく子ども達に、私たち大人はどう向きあい責任を果たしていったら良いのか。

「故郷」「絆」「思い出」、それは寄りかかれる安心の懐旧、その喜びに裏うちされた歌として、歌いたいものだと切に思う。

「落ち葉たき・焼芋自粛」が県から要請された。保育園の子ども達が焼芋をほおばる様子が報道される年中行事を、今冬は見られない。落ち葉に、放射性セシウムが付着しているかもしれないからだという。なんともなさけない2011年の師走なのだ。

---

**【筆者紹介】狭間 壮（はざま　たけし）**：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中ＮＨＫ「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

# 連載　名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

## 〔第 24 回〕スポーツに因む曲

2011（平成 23）年は、これまでにない大変な年であった。アメリカはリーマン・ショックのあおりで株価が大暴落！不景気が世界中に広がったと思ったら、3 月には大地震が東日本を襲い、2 万人以上の死者・行方不明者を出し、続く福島原子力発電所の爆発によって今度は放射能の拡散不安と避難騒ぎ。飼料汚染による食牛肉の不安が日本中を駆け回る中、政界は相も変わらぬ権力争いに明け暮れて、また首相が交代するというカオス（混沌）のわが日本。

庶民にとって明るいニュースといえば、東北の人々を助けるためのボランティア活動があちこちで盛りあがったことに加えて、女子サッカー「なでしこジャパン」が世界大会で優勝したこと。夏の高校野球で被災地東北勢が大活躍したことなど、主としてスポーツの分野で慰められたり元気づけられることが多かったような気がする。

そこで今月は、スポーツと音楽についてちょっと考えてみようと思う。一見すると“動”と“静”に見える両者だが、しかしよく考えると意外に密着している。いい例が各種の体育祭や表彰式で、その背景には大抵ふさわしい音楽が流されている。ネッケの「クシコス・ポスト」とかヘンデルの「見よ、勇者は帰る」といった曲を思い出せば、誰もが「なるほど」と納得するだろう。最近のエアロビクスやダンス競技、スケートのフィギュアなどでも、そう。音楽が無かったら、およそつまらない。

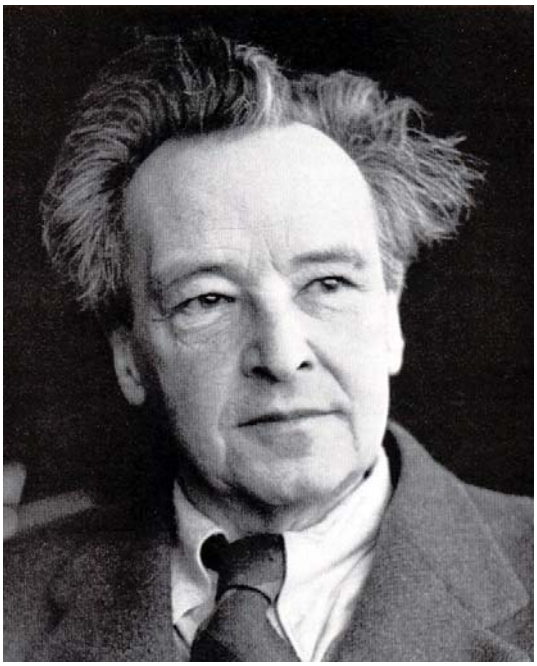
ところがである。こうした音楽は、ただリズムや曲想がその場に合うというだけで、作品そのものはスポーツをテーマにしたり想定したものではない。使用する側が勝手に合わせて利用しているものがほとんどである。それよりも、純粋にスポーツをテーマに書かれた曲・因む曲はないのだろうかと思う人が、ひょっとしているかもしれない。じつは僅かではあるけれど、そういう曲があるのである。

一つは、すぐに思い浮かべる人がいそう

な E. ワルトトイフェル（1837～1915、フランス）のワルツ「スケーターズ・ワルツ」（スケートをする人々）（1882）である。かつてはスケート場の看板音楽であったこの曲。ナポレオン 3 世のユージェニ皇后に仕え、宮廷舞踊場の指揮者として活躍しながら作曲したという作曲者の、268 曲あるワルツの一つ。もう一つの人気曲「女学生」とともに、日本でも古くからのおなじみである。

フランス 6 人組の一人、A. オネゲル（1892～1955、スイス）の交響的運動「ラグビー」

（1928）も、文字通りラグビーをテーマにした作品として有名である。これは交錯する2組のラグビー・チームの動きを一つの感覚的な運動としてとらえ、2つの主題の対位法的な扱いによって描いたエネルギッシュで跳動感にみちた作品。じつは作曲の動機というのが、変っている。ある日オネゲルがラグビーの試合を観戦していると、傍らにいたジャーナリストが、「こうしたスポーツを音楽化することは、可能でしょうかね？」と尋ねた。「あゝ、可能だよ」と気軽に答えると、数日後の新聞に「オネゲル氏が＜ラグビー＞と題する新作を作曲中」と出てしまった。文句を言うのも面倒なので、そのまま書いてしまったというのである。



**アルテュール・オネゲル(1892-1955)**

オネゲルには、もう一つ「スケート・リンク」（1921）というバレエ音楽もある。スケート・リンクを舞台に、一組の男女の愛と、恋人を取戻そうとする男とのすれ違いを、激しい踊りを交えて描いたもの。ジャン・ポランという人の振付によりパリで初演したものの、失敗しそのまま忘れられてしまった。

似たような作品は、C.ドビュッシー（1862～1918、フランス）のバレエ音楽「遊戯」（1912）もそう。これにはテニスが登場するが、舞台は夕暮れの庭である。

どこからか飛んできたテニス・ボールと、それを追ってきた若い男と二人の女性。男女がカップルとなって官能的な踊りを踊り始めると、もう一人の女性が交錯して、さらに激しく踊る。そこへ再びボールが飛んで来て、びっくりした3人が逃げ出す――というバレエの音楽で、これもニジンスキーによる初演が失敗して、そのまま忘れられてしまった。

そのほか、コープランド（アメリカ）のバレエ組曲「ロデオ」、フォスター（アメリカ）の歌曲「草競馬」、ヨーゼフ・シュトラウス（オーストリア）の「スポーツ・ポルカ」、モーツァルトの三重奏曲K.498「ケーゲルシュタット」（九柱戯＝ボーリングに似た遊び。これをしながら思いついた）といった作品もある。

**【宮本英世氏プロフィール】**1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。

【連載】

# 音盤奇譚

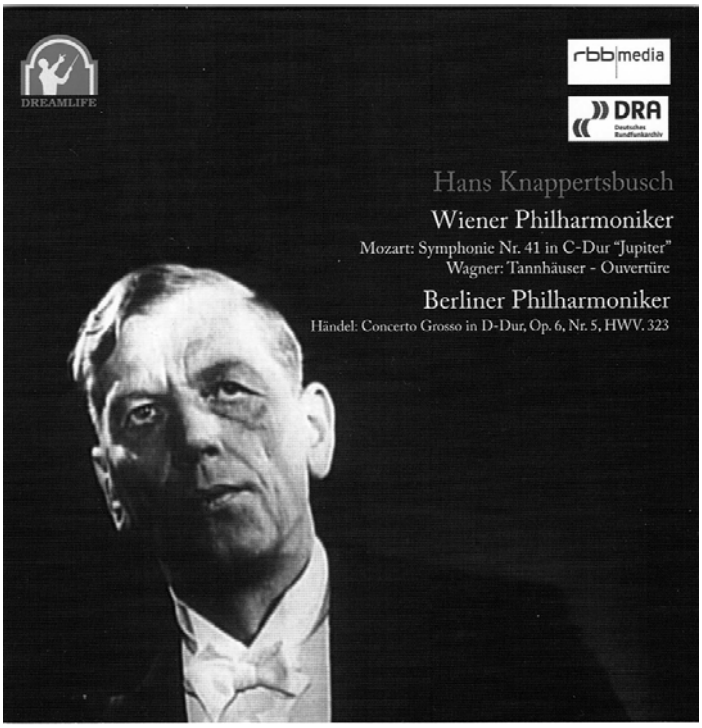
板倉 重雄

第 29 回

## クナッパーツブッシュのジュピター・シンフォニー

2012 年 11 月 23 日、遂にクナッパーツブッシュ（1888～1965）指揮のジュピター・シンフォニーが CD 発売された。ウィーン・フィルとの 1940 年 5 月 12 日の放送用録音で、今回の CD で初めて世に出る音源である。

実は、同コンビによる別のジュピター録音（1941 年録音）は 20 数年前から私家盤の LP で出回っていた。クナッパーツブッシュ・ファンの筆者も、発売されてすぐに手に入れたが、その演奏内容にはがっかりさせられたものである。彼の有名な遅いテンポ、ゆったりした呼吸感があまり感じられず、冒頭から速いテンポでぐんぐん進むのに戸惑ってしまったし、録音も痩せていて聴き通すのが辛い位の状態だったからだ。あのワーグナー演奏のような雄大さでジュピターを描いていてくれたら、どんなに素晴らしい感動を味わえたことだろう…。




そこへ登場したのが今回の CD である。出所が怪しかった 20 数年前の私家盤 LP とは違い、今回は DRA（ドイツ放送アーカイヴ）所蔵の音源を使用していて、正真正銘のクナッパーツブッシュの演奏と言えそうである。その 1 点に期待して CD を入手、そして聴いてみた。

冒頭主題の念を押すようなリズム、踏みしめられるテンポ！　私家盤とはまるで違う、まさしくクナッパーツブッシュならではの開始である。何と大きな広がりをもったジュピターだろう。長年の夢が実現するときが遂にやってきたのである。その後の展開も実に個性的だ。第 1 楽章では楽想の転換点でテンポを変化させる手綱さばきが絶妙で、ゆったりとした呼吸と音楽の推進力をともに感じさせるのが見事。漸強弱を使った旋律の豊かな歌わせかたもワーグナーを得意とする彼ならではだ。終楽章の解放感溢

れるコーダまで心が震え通しの34分間だった。録音状態も当時としては最高で、十分鑑賞に堪える状態である。この音源を世に出してくれたニホンモニター株式会社に感謝！

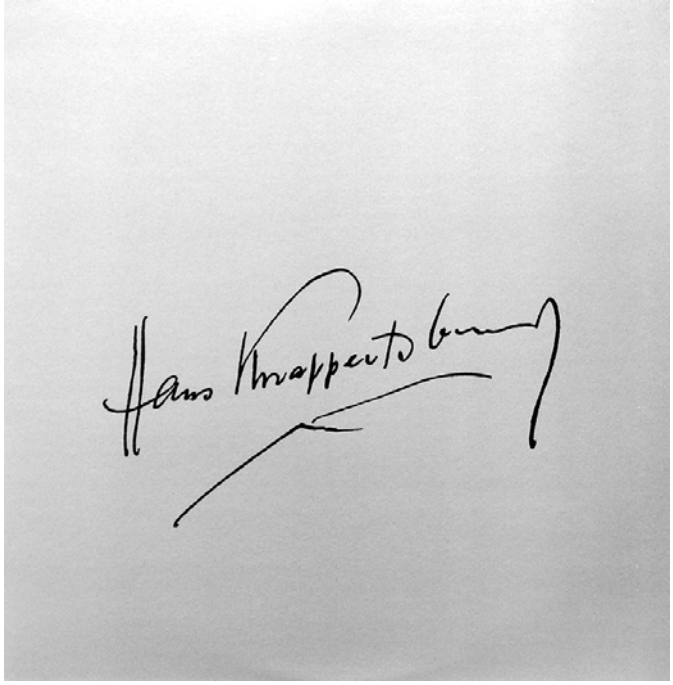
●モーツァルト：交響曲第41番《ジュピター》

●ワーグナー：《タンホイザー》序曲

●ヘンデル：合奏協奏曲作品6-5

　クナッパーツブッシュ指揮ウィーン・フィル、ベルリン・フィル（ヘンデルのみ）

［ニホンモニター　DLCA7032（CD）］　（写真　前ページ）



1940年5月12日、及び1944年2月15日（ヘンデル）の録音。モーツァルトとワーグナーは世界初登場となる音源。ただし、ワーグナーには約3分間の欠落がある。ディスク録音のモーツァルト、ワーグナーに対し、ヘンデルはマグネットフォンによる磁気録音で一層素晴らしい録音である。

●モーツァルト：交響曲第40＆41番

●ベートーヴェン：交響曲第2番

　クナッパーツブッシュ指揮ウィーン・フィル（モーツァルト）、ブレーメン・フィル（ベートーヴェン）

［私家盤　HK1006～7（LP廃盤）］（写真　左上）

モーツァルトは1940～41年録音、ベートーヴェンは1952年12月12日録音と表記。本文で触れたとおりモーツァルトはクナッパーツブッシュらしくない指揮ぶり。今も数種の海外盤CDで聴ける。ベートーヴェンはその後正規盤CDが現れた（仏ターラ　TAH4012）。

---

**【板倉重雄氏プロフィール】**1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMVジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」（アルファベータ）を上梓。

## コンサートレポート　若い翼によるコンサートⅣ

12 月 12 日（土）すみだトリフォニー小ホール　18:00～

この公演は今回で四回目になる。今回前半の出演者。ソプラノ、羽根さやか。R.シュトラウス、「献呈」、ハイドン、「天地創造」からのアリア。ピアノ・ソロ、内野俊。シューマンの「アラベスク」「アレグロ」。ソプラノ、安孫子みどり。グノーのオペラ「ロミオとジュリエット」から二曲。そして、フルートのデュオで、伊藤祥子と大津祐果で、E.ボザ「三つのエヴォカシオン」。いずれも、新人としては上位の水準の演奏結果が揃ったことはおおいに賞賛評価したい。

総論的な論評を明記しておきたい。歌や絃のような音程を自分で作る種目にあっては、発音の頭初から極厳正な音程で発音することを心がけてほしい。ほんの僅かの時差を置いて所定の音程に達することは人の耳に、全体的に曖昧な演奏の印象をあたえる。音楽を聞く時、人の耳は器械を超えるほど敏感になっている。一秒の何分の一かの時間現象を識別するのである。このことは大変な緊張を要するが、その緊張が音楽の表現力となって人に伝わるのだから。ピアノのように固定音の楽器では、同時に鳴る音が厳正に揃っているかどうか。左右両手はもちろん、片手の中の音もしかり。今回はこの点がよく出来ていた。このことはフルート・デュオの場合も同じである。「音楽には技術だけではない、内容が・・・」という訓戒が間々あるが、厳正な技術こそが内容を造りだす。プロは何をおいても技術の完成を目標にすべきであることを強調しておきたい。(助川敏弥)

休憩後、後半のレポートは北條が担当する。
まず、後半の始めは菅野真衣のチェロ独奏でチェロの巨匠カサドの無伴奏チェロ組曲より第一楽章、それとピアノの広瀬美紀子が加わって当会代表でもある作曲家、助川敏弥の小品「夜の雨」が演奏された。カサドの曲は近代から現代に繋がるチェロ独奏の名曲でこの楽器ならではの特性を生かした奏法が織り込まれている難曲でもある。菅野は小柄な体に似合わず演奏は力強く、低音部、高音部に渡っても音色は澱み無く、リズムの感じも歯切れ良くこの曲をしっかりと纏め上げていた。ただ、注文を付けるとすれば、装飾音符の弾き方の明確さや、ときに現れる高音域での僅かな音程の不安定（確かに難しい箇所かもしれないが）等の克服が課題として必要であると思われる。そしてもう一点、曲の仕上がりはすっきりしていたのだが曲の焦点をどう持ってくるか？或はどう設定するかと云う事（演奏を最も凝縮させる一番の聴かせどころ）がまだ充分ではなかった様に私には見えたがこの辺りは今後の

解決すべき課題であろうし彼女の音楽的センスなら無理ではないし充分、成し遂げられよう。

助川の「夜の雨」は平易な書法の中にも現代性が秘められた３分程度のいぶし銀の佳曲であった。もともとヴァイオリン曲だったものをチェロにアレンジしたと云う事でチェロらしい音色を聴かせる曲ではなかったが、それを感じさせないさり気ない演奏で伴奏の広瀬の的確なサポートも含め少し苦みがあるこの曲の味をこの二人は我々に伝えてくれた。

次はヴァイオリンの中村響子とピアノの石岡久乃による有名なセザール・フランクのヴァイオリンソナタからの一、二楽章の演奏。中村はこの楽曲の構成的な構造をしっかりと捉え、主観に流れる事無く、手堅く曲を纏め上げていた様に思う。音色も良く、ダイナミクスレンジも幅広く、しっかりとした技術に裏付けされた演奏は今後にも期待出来る若手と言って良いだろう。但し、若さからか、幾分の固さも見られ、第一楽章冒頭のテーマが持つノスタルジックな、或は夢見る様な雰囲気は伝わって来なかった。この辺りが彼女が更なる成長を勝ち得るための課題となろう。また、第二楽章の突き上げる様な情熱的な第一テーマの演奏についてもそれを一心同体と感じて弾けばもっと印象深い演奏になったと思えるのだが。更に上を目指すには以上の事を必要な今後の課題として是非考慮して欲しい。また、ピアノの石岡は的確な技術を持ったキャリアのあるピアニスト。難しいピアノのパートを彼女は余裕を持ってバランス良く弾きヴァイオリンを良く支えていた。欲を言えば余裕があるせいか少々冷静すぎてフランク独特の内面の情熱が封印されてしまった様に私には感じられたのだが。伴奏者であってももう少し前に出てソリストを刺激する側面があっても良かったのではないだろうか？

後半の三つ目では寒河江真弓のピアノ独奏でメンデルスゾーンの「厳格なる変奏曲～主題と１７の変奏曲」が演奏された。この曲はバッハ、モーツアルト、ハイドン、ベートーベンと繋がるドイツ古典音楽の正統的な継承が成されている曲としてピアニストにとり地味ではあるが案外、纏めるのには手こずる作品でもある。彼女がこの曲の対位法的側面も、和声的側面に対しても澱み無い音色で一つ一つ明確なタッチで弾き丁寧にこの曲を纏めていたのには筆者も感心したし好印象を持てた。又、音質も良く、太い音で、ダイナミックレンジの広さも今後の可能性を感じさせる資質の持ち主だと思われる。ただ、残念なのは前半に数回の同じ箇所の弾き直しのミスがあった事。勿論ピアノの名手といえども稀にはこう云うミスを犯す事はあるのだが、やはりこう云った場合は其の音楽の流れを大切に、曲の持続が途切れない事を最優先し少々のミスには目を瞑り立ち止まらずその場を通り抜ける事が正解

であろう（途中の停止は音楽の死と等しいとも云える）。期待出来る演奏家だからこそ敢て苦言を呈した訳でこれを契機として研鑽し更なる発展を遂げて欲しい。

最後は当会の青年会員でもあるソプラノの齋藤希絵とピアノ、森田真帆による声楽曲。R.アーンの「リラの葉陰のナイチンゲール」、フォーレの「ばら」、ドビュッシーの「出現」そしてグノーのオペラ「ロミオとジュリエット」よりアリエッタ“私は夢に生きたい”の４曲が演奏された。始めの曲は歌に取っての準備運動的要素もあったのかもしれないが後の３曲が強く印象に残っている。フォーレでは歌唱とピアノのフィギアが心地よく溶け合い澄んださわやかさを運んでくれたし、ドビュッシーでは彼の持つ独特の響きの陰影が声とピアノにより色彩を伴って良く表現されていた。そして特に好感を持てたのが、齋藤の歌唱が其の詩と曲の世界に入り込み、決して作為的な演技では無く、このステージで今、この時を生きていると云う気分を我々にはっきりと伝え得た事である。歌うだけでなく詩やドラマの世界に自然に入ると云う事は、以前聴いた彼女の歌と比べると長足の進歩である。また、声質はどちらかと云うと細い方かもしれないが表現者としての彼女はそれを補って余あると私には思えた。それとピアノ伴奏を受け持った森田のピアノも歌に寄り添い着かず離れず、受動的に留まらず良い意味で歌に対して時には刺激を与え、心地よいデュオを作り上げていたのは褒められるべきであろう。この息の合った演奏で他のフランス歌曲等も是非、聴いて見たいとも思う。更にこの二人が自分たちの地平を切り開いて行く事を望んで止まない。

最後になるが、全体としてこの演奏会で感じた事は、過去と比較して、こう云った若い演奏家の演奏レベルの高さ、技術の向上、進歩には目を見張るものがあると云う事だ。最近の大震災、経済の低迷等で日本人がともすると自信を失いそうになりがちな現在の状況で、この事は単なる音楽の発展に希望を与えるだけに留まらず我々の未来にも希望を与えるものとして私は受け止めたいと思う。

助川敏弥／北條直彦　記　２０１１　１１／２０

★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

**【11 月号の訂正】**

27ﾍﾟｰｼﾞの　「**第３章では**」　から始まる段落の以下の部分　の下線で示した年号

またウィーン会議以降の時代、フランスではシャルル 10 世が時代錯誤な反動的政治を行い、市民の大きな怒りを買い 1830 年の 7 月月革命で潰されるが、メッテルニヒ体制は、ともかく 1948 年まで続いたこと。

これは、1848 年の誤りですので、訂正させていただきます。

# 現代音楽見聞記（10）2011 年 10 月

音楽評論　西 耕一

秋の演奏会シーズン突入で今月は 19 の会を観た。特に一つを挙げるならば、23、24 日に行われた下野竜也指揮読響による原爆テーマの二作、團伊玖磨の交響曲第六番 HIROSHIMA とジョン・アダムズの原爆博士交響曲であろう。この選曲は震災以前に決まっていたものである。選曲公開当時は何故に？と思ったもの。演奏会は、ただの偶然とは思えない言い知れぬ不気味さを纏って行われた。アダムズの色彩感ある響き、團の構築性へ下野のキレのある指揮が新しい解釈を与えてくれる。音楽会としては心地よく聴いたものの、團伊玖磨の第六番が初演された頃のように日本が復興を遂げるのはいつであろうと答えのない問題を出されたような煮え切らなさも抱かずには居られなかった。

以下は日付順に。2 日サントリー作曲家の個展は三輪眞弘。PC 等のテクノロジーを使いつつもアナログな発想や仮定による創作は確かに注目されるに値する。また、音楽単体でなく何をどう発表するかで社会的な問題提起も行う姿勢は、三輪の発表した「中部電力宣言」に関わる CD プレーヤーと管弦楽の作品でも徹底された。3 日はアジアオーケストラウィーク 2011 の記憶にも新しい 2 月 22 日の NZ 地震を受けたクライストチャーチ交響楽団によるラウタヴァーラ交響曲第七番「光の天使」。4 日は CMDJ の様々な音の風景 VIII。北條直彦「翔、響、彩」改訂初演の凄烈にして豊穣たるピアニズム。助川敏弥ゆめじ初演 Toccata, Au Soleil 初演の闊達にして自由なる美への憧憬。ロクリアン正岡エコロジスト讃歌は混声を加え正岡も歌う。Vc 安田謙一郎のデモーニッシュな響きも手伝い異常な盛り上がりとなる。5 日東京混声合唱団定期は岸野末利加への委嘱初演。

6 日若手作曲家集団「秘密結社」が TOYOTAKArutetto による木山光、藤原典子、松本直祐樹、山根明季子、渡辺裕紀子の弦楽四重奏全曲初演。7 日橘川琢 5 度目の個展。藝大定期第 344 回で堀優香の管弦楽曲バイモーダルペダル。8 日明治学院大にて望月京音楽の現代能春と修羅。9 日飯野明日香ピアノリサイタルとして一柳慧と彼に関わるピアノ曲を演奏。内部奏法やプリペアドでケージ、フェルドマン、カウエル等、二台ピアノでのパガニーニパーソナルは一柳慧と共演で初演。14 日東京佼成ウインドによるメイエの弦セレ。弦セレを吹奏楽で行うという解釈はかなり驚きではあるがその世界に居れば違和感もないのだろうか。新作も調性で鳴りが良ければそれでいいのだろうかと？だらけ。15 日藝大プロジェクト 2011 元禄～その時、世界は？第 4 回「オスマン帝国の栄光～トルコ行進曲の秘密」でトルコ軍楽隊の楽器やその影響に因る音楽を聴く。19、20 日は鴨下信一演出・阿刀田高主宰の朗読 21 にて森ミドリ音楽による朗読を聴く。22 日アルベンベルク協会の例会にて vn と pf のデュオ Rosco の演奏会。26 日アールセスピラン定期。委嘱は大場陽子。伊左治直や山根明季子への委嘱など期待と共に続けられた紀尾井ホールとの共済シリースは今回で終。 30 日オーケストラニッポニカの山田一雄個展。没 30 年の山田の作曲へスポットを当てた意義ある企画。交響的木曾、バレエ呪縛、日本の歌等。山田の娘英津子のソプラノに感銘深し。

（にし・こういち　賛助会員）

# 国際化時代を反映した日本電子キーボード音楽学会「第 7 回全国大会」

阿方　俊（昭和音楽大学）

日本電子キーボード学会は、昨年の総会で学会名に音楽を加えた「日本電子キーボード音楽学会（Japan Society for Electronic Keyboard Music)」略称 JSEKM と改称し、その第 7 回全国大会が 11 月 12 日、東京学芸大学で以下のプログラムで開催されました。

- あいさつ　筒石賢昭（東京学芸大学）、柳田孝義（学会代表幹事）
- 基調講演　郭宗愷（台湾・東海大学）
- 総　　会　活動報告など
- 事例発表　王暁蓮（北京現代音楽学院）、王永剛（ハルビン大学）、譚芸民（西安音楽学院）謝及（星海音楽学院）、楊倹坤（広東市現代文化芸術訓練学校）
- 研究発表　西岡奈津子（電子オルガン演奏家）、薛慶（広州外語芸術教員養成大学）、金銅英二（松本歯科大学）、宮本賢二朗（浜松学芸高等学校）、小林恭子（目白大学）、松本裕樹（和歌山大学）
- 研究コンサート　ピアノ：R. プラッゲ（モーツァルテウム音大）、中地雅之（東京学芸大学）ハイブリッド・オーケストラ：東京学芸大学学生
- 懇親会

通常、学会というと欧米にその範となるものがあるのが一般的ですが、電子キーボード（電子オルガン、電子ピアノ、一段電子キーボードなど）に関するものは見当たらないのが現状です。また JSEKM の研究分野は電子キーボードの「演奏」「教育」「理論」の広範囲に渡るため、国際的視点から考えて発信して行くことが学会の理念になっています。ここでは海外参加者を中心に簡単にレポートします。

今年度は台湾（2 名）、中国（17 名）、オーストリー（1 名）から合計 20 名の参加者があり、日本の電子キーボードを考える者にとって得難い情報を得ることができました。

台湾の郭宗愷博士は、8 台の電子オルガンによる「東海大学電子鍵盤管弦楽団」で、定期演奏会のほか大学オペラ、教員コンサート、大学院修了生のための協奏曲などで年間 10 数回のコンサートに出演しており、日本の音楽大学では見られない電子オルガンの重要な位置づけをもつようになった課程を説明し、参加者に強いインパクトを与えました。

中国では今、日本の昭和 40 年代の高度経済成長期にあり、音大の電子オルガンについても質的・量的に著しい成長をはじめていますが、その一端を、学会活動、小

学校鑑賞教室、コンクール活動などから事例発表として説明がありました。かつての高度成長期の日本と現在の中国の相違は、当時の日本では音楽大学が電子オルガン教育にほとんど関与しなかったのに対して、中国では音楽大学関係者が主導的に活動している点に特徴があるといえます。日本や台湾にとって示唆深いものがありました。

研究コンサートでは、モーツァルテウム音楽大学のロルフ・プラッゲ教授のピアノと東京学芸大学学生による ハイブリッド　オーケストラ(電子キーボードに少数の弦管打楽器が加わったもの）のリストの“悲愴協奏曲”が演奏されました。これは東京学芸大の中地雅之准教授の提案に、プラッゲ教授が“新しいものには挑戦する必要がある”と応えたもの。将来に向かってこのようなチャレンジ精神が欲しいものと感じた人は少なからずいたのではないでしょうか。JSEKM は会員 100 名ほどの小さな学会ですが、今年も将来の音楽界に対して、新しい発信ができたのではないかと思っています。

（あがた・しゅん　本会　研究会員）

チャイコフスキー：組曲「くるみ割り人形」よりあし笛の踊りを演奏中の
学芸大学 ハイブリッド　オーケストラ

リスト：悲愴協奏曲を演奏中の Prof.R. プラッゲと学芸大学 ハイブリッド　オーケストラ

# 福島日記（5）　　作曲　小西 徹郎

先日、シンガーソングライターの松本隆博さんの２０１２年１月２５日リリース予定の「リトマス試験紙 / アーティスト（仮）」のコーラス隊のオーディションを学内で行った。松本隆博さんは実弟がダウンタウン松本人志さんで、とても心が熱く、厚い人で「社会貢献的エンターテイナー」として活動を続けている素晴らしいシンガーソングライターだ。その人柄が楽曲を通じて音楽の表情として伝わってくる、そんな歌を歌ってらっしゃる方なのだ。

このオーディションではミュージック音響科のみならず声優・俳優科の学生も参加することとなりオーディションの「お題」を考えていた。「コーラスをレコーディングする」これだけのことなのだがただそれだけでは面白くない。１人１人の「ひとつの声」だが、その「ひとつの声」にも学生各人の想いと人間性を音楽に反映させたい、そう思いオーディションのお題を「夕焼けに向かって叫んでください」と「あなたのドレミファソラシドをきかせてください」という２つのお題にした。Wasabi Music Entertainmentサイドでこの提案を快く受け取っていただき、そのことが私自身もうれしかった。音程はしっかりしていて当然、発声も歌心もあって当然、だがこの２つのお題は「声」だけでなく「目に見える表現」がとても大切な要素になってくる。私は学生たちがオーディションまでに何をどう考え、どういうふうにアプローチをしてくるのかがとても楽しみであった。

オーディション当日、私も審査員として出席しオーディションは始まった。皆それぞれが考えに考え抜いて出してきた表現、とても好感が持ててとてもうれしかった。このお題に対して自分は何を出すべきなのか？審査が始まる直前まで考え、推敲し練ってきたことがとてもよく伝わってきた。振付をする者、セリフを考えて叫ぶ者、多くの人に自分の表現をみせていく、伝えていく、その真剣さが伝わってきたのだ。各人終わる毎に審査員長の小島誠一先生、私、Wasabi Music Entertainmentの荒川良太氏が代わるがわる講評していく。緊張感がありながらもとても熱く、あたたかなムードの中、無事オーディションが終わった。

その後日に合格者が発表され練習期間に入った。伸びやかに空に向かっていくようなメロディ、そのメロディに２声でコーラスをつけていく。「夕焼け」というキーワードは実はこの楽曲を聴いたときに感じた自分自身の心の風景であった。学生

各人が楽曲に向き合い、解釈をしながら練習に取り組んだ。そして、先日コーラス隊のレコーディングがスタジオで行われた。

その中でうれしいことがあった。オーディションに合格し、録音に参加してくれた声優科の学生、彼らのレコーディングを少しだけ覗いた。彼らは今回のレコーディングへの参加を「チャンス！」として捉えて本当に真剣勝負でレコーディングに向き合っていた。レコーディングは間違えたら何回でもやり直しが可能だ。（もちろん本来は許されない）だが彼らは完全に一発で完璧なものを録音するぞ！という気合を感じたのだ。

そして一回目の録音が終わってチェックしたときに、声優・俳優科の１年生の遠藤吉昭君が「今のさ、俺迷いがあったんだよ！」と言った。もちろん出来は問題なかった。だが彼にはその「迷い」が 彼自身の中で許されないものであったのだ。そして彼の希望でもう一度レコーディングをすることになった。

その様子を目の当たりにして私はとても心が熱くなった。意識の高さ、これはプロだったら当たり前のことだ。だが歌の出来だけでなくそこにその瞬間に自分自身を１００％出し切る！という真剣な姿勢、高い意識、そこが私の心を動かした。声を録音するのだから声がよければいい、ということではなく、ひとつひとつの声にひとりひとりの想いや熱意や感情、息遣い、そして「その人そのもの」をひとつひとつの歌声に込めていくこと、これが音楽にとって最も重要なことである。私が普段言い続けているように 音や音楽の外側にあるものが表現を豊かにしていくのだと。そのことをもっと多くの学生に伝えたいと思う。そしてぜひ彼ら学生たちにはこれからもがんばって進んでほしいと願っている。

ひとつのことをやり続けていくということ、続けていれば惰性になってしまうこともあるだろう、妙に慣れてしまうこともあるだろう。だが、いつもフレッシュに、いつも志と気持ちと思考を高めていく、この姿勢は大人も学ぶべきだと思うのだ。

（こにし・てつろう　作曲会員）

# 《明日の歌を》— 楽友邂逅点ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

第五回　Intermission　～料理人の聴く世界

情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。
五回目は、料理人として厨房に立ちながら、日本をはじめヨーロッパ各地のコンサートホールや劇場で音楽を聴き歩いてきた、親しい元同僚との話を対話形式で綴ります。尚、本人のご希望により、名前等は伏せさせて頂きます。

**■橘川 琢（作曲家・日本音楽舞踊会議理事）**
作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派（「音楽現代」誌）』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価を追究している。

*料理人としてフランス料理店の厨房等に立ちながら、早朝に別の仕事を持ち、昼夜問わずめまぐるしく働いていた彼の姿を、今でも覚えている。空いた日に足しげくクラシックのコンサートへ行き、さらにヨーロッパを旅し、現地で一流のオーケストラの演奏を聴き歩いていたという。*
*ごくたまに合うお互いの休日。音楽について料理について、そして表現する事や伝える事、受け取ってもらうという事・・・多くの事を話し込んだ。分野は違えど、互いの仕事への敬意を持ちつつ、自分の分野に通じる事を、互いの話から取り入れつつ・・・。１１月２１日、久しぶりの再会。*

## ■Apéritif　−空腹感ということ

「今はね、みんな、お腹が空いていないんです。」

*──ほう、お腹が空いていない。・・・それは？*

「飢えるような気持ち、本当に『食べたい！』という純粋な欲求を見つけられないということ。それにお腹をすかせてでも本当に食べたいものは何かを心から追い求める感覚。求めることも、そういう状況や場を作る欲求も薄い。」

*──なるほど。小腹が空いたらそこらでほどほどに何か食べて。幸い食べられる場所や状況はたくさんありますしね。*

「そう。だから適度にお腹いっぱいな状況。そこを我慢して空腹になり、良いものを食べたいという欲求を持てるかどうか。こまごまと食べずに・・・。音楽で言うと、街中至るところに音が溢れ、多く聴かされている状態に近いかも。」

*──たしかに日頃からそういう状況ですと、音や音楽に聴覚、さらに感覚が飽和状態になってしまうかも。『音を聴きたい』、さらに『本当に良い音や音楽を聴きたい』という飢餓感を覚えなくなるかもしれない。もしくは中途半端に満足感を覚えてしまって、それ以上は必要なく感じてしまうか。まさにほどほどに満腹という感覚・・・。*

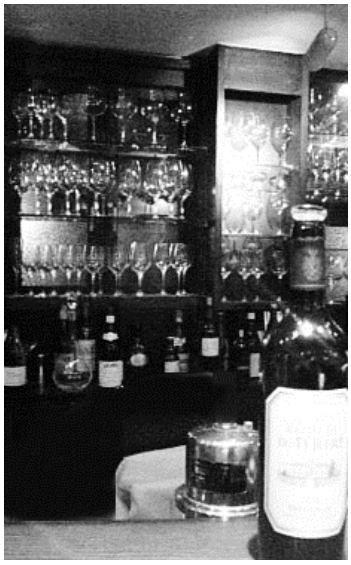
「でも、コーヒー一つにしても味も金額も違う。喩えが下世話になっちゃうけど、１２００円の味と１２０円の味の違い。空腹を埋めるようにこまめに１２０円のコーヒーを１０本のんでも、一杯１２００円の味にはならない。」

*──ええ。*

「１２０円の味も『欲しい』と思えばもちろん悪くはないけど、高級な店の１２００円のコーヒーには、やっぱり１２００円の味がある。経済的にも普段からそういう高いものばかり飲むわけにはいかないけど、その逆に、腹をすかせてもおいしいものを食べたい、飲みたいという気持ちをつくるべきじゃないかな。料理にしても、きっと、音楽にしても・・・。」

*──なるほど。それぞれ互いの代わりにはならない。違いを求める感覚や感受性、そして本当の飢えの感覚を持つということですか。*

**■コース料理、満足感というもの**



*──ところで、演奏会のプログラムを決めることと、コース料理のメニューを決める事、どうも似ているところがあるんじゃないかと時折思います。提供する側としてみても、受け取る側からしてみても。*

「まあ、コースなら出す順番とか型がありますよね。コースでなくても、素材から何から何まで完全にお任せになっても、たとえばテーマを決めてもらうとその後の展開が決まります。」

*──テーマと展開、ですか。どういう順番で出せば満足してもらえるかというのが、コース料理って良く出来ているなと思います。音楽にも「前奏曲」や「間奏曲」など、種類や形式がありますが・・・。*

「ええ。」

*より広く捉えれば、演奏会だったら約２時間、CD なら７４分。その受け取ってもらい方や組み立てを考えること。その中で、企画者としていつも受け取り手の「満足感」というものを考えずにはいられないです。といいますか、とても大切な事だと思うのですが。*

「満足感・・・。料理で『満足感』という事で言うなら、相手の状態、空腹の度合いも大きいです。コースでなくとも、仮に、何か満足できるものを一品だけ出すとしたら、相手が何も食べていないで空腹の時はざっくり切ったりしたタマネギやソーセージを出します。食べ応えのあるものを、食べ応えを増すような形でね。それまでに何か食べてきた人には、細かく切った料理を。例えばいっその事、簡単なお茶漬けにするとか。

だから相手の状態を知る事が大切。同じ素材でも料理方法で状況に応じて満足感を与えられるし、そういう工夫もあります。」

**■厨房にて・・・素材の料理方法**

*──欲している人に向き合う事、そして同じ素材を前にしたときの工夫というもの。興味が尽きないところです。作曲しているとき、与えられた条件下で与えられた素材をどう扱うか、それこそどう「料理するか」という事、いつも考えさせられます。実際「料理」の場合、素材に対しての向き合いかたの「コツ」や「基本の考え方」というのはあるのでしょうか。*

「うーん。今の時期だと・・・たとえば、さんまの天ぷらというのは、あまり無いです。モノにもよるけど、脂ののっているものに油をのせるのは美味しくない。当然、天ぷらにしたら美味しいけど、煮たら美味しくないというものもある。調理方法は素材によるし、経験から出た答えがあります。」

*──ええ。*

「料理方法、素材の活かし方というと、一例として『足し算』『引き算』『かけ算』という考え方もあります。『足し算』では、どんな材料や調味料、香辛料を加えるか。例えば、肉の持つ脂肪の甘みを活かすため、何を足せば美味しいソースになるのか。

『引き算』は、加えるものをどんどん削って減らして行く思考。加える事による『厚ぼったさ』を無くす。例えば和食。春菊の風味を良くするために、加えようと思えば幾らでも加えられる物をどんどん削ぎ落とし、最小限に減らしてゆく。

『かけ算』は、作る材料が決まっているものの種類を変えたりして、さらに豊かなものを作る。麻婆豆腐のソースにどんな豆腐が合うのか突き詰めて考え、豆腐の種類を変えたりして味のかけ算の結果を変えてみるとか。色々あります。」

*──なるほど。「足し算」「引き算」「かけ算」、面白いですね。色々な表現分野に応用の効きそうな考え方です。*

■そして演奏会へ・・・そこにしかない「香り」を聴きに

*──ところで、色々な演奏会・生演奏を聴きに日本・海外問わず多く行っていらっしゃるようですけれど、今、こうして演奏会の場に行くということの意味は、どの辺りにあるのでしょう？情報という点では、音楽はCDで聴いたりネット上で視聴できるのに、急がしい日々の中コンサートホールで演奏会を聴くのはなぜでしょう？*

「料理と同じく演奏会にも『香り』があると思います。そこでしか聴けない、その時間でしか味わえない、そこに漂う香りというものがある。空腹の満たし方に似ていて、小腹が空いた時家でインスタント食品のように音楽を聴く方法もあれば、高級レストランへ行って全身で堪能するような聴き方もあるんじゃないかと思う。」

*──さっきの話に戻ると、本当の空腹感や飢餓感を得た上で、生（なま）の最上のものを食べたいと思う時や、欲求もある。*

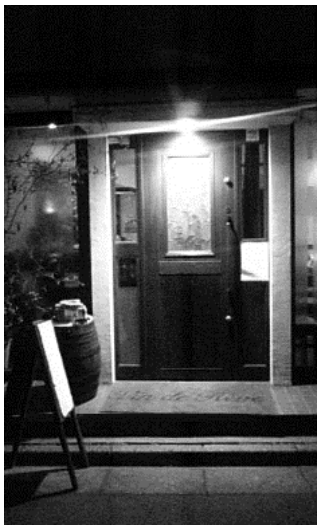
「そう。すばらしい演奏会で音楽を受け止める機会は、自分で調べ、足で歩いて得られるわけですし。音楽の中で良いもの、偉大なものを受け止めるのに今の時代、身分は関係ないと思います。限られた人しか受けられなかった時代と違い・・・。」

*──はい。*

「自分は凡人だけれど、世の中の最高のものを受け止める度量を持ちたい。人生が豊かになるものを受け止めたいし、また出来れば豊かなものを自分からも伝えたい。自分や自分の作る物を通じて・・・。そう思います。」

*──他分野の偉大なものを受け止め、それを自分の分野にフィードバックする。そうありたいです。是非これからも切磋琢磨させて下さい。もっとお話を伺うために、近々ゆっくり、またお店に伺いますね。」*

「是非。お待ちしています。」



写真／取材協力：
『vin de reve（ヴァン・ド・レーヴ）』（東京都中央区銀座）

（《明日の歌を》楽友邂逅点　第五回 ”Intermission”完）

# 『音の科学と音楽』　〔X〕(補)

## ボエティウスと≪musica scientia≫そして『De institutione musica』

## (2)

## ―『De institutione musica(音楽教程)』その内容をめぐって―

## 〔第Ⅲ章〕

研究　大久保靖子

『音楽の世界』2010 年 11 月号に掲載されました上記題名の記事に関して、その第Ⅲ章が脱落していたので、今回それを補っていただくことにしました。先般の図版に引き続きの不手際で申し訳ありません。読者の皆様にご迷惑をお掛けいたしましたこと深く陳謝いたします。以下がその箇所です。

### Ⅲ　響和判断における感性と理性

響和の判断は、ギリシア古代から時代思想を背景に変化します。一般にはピュタゴラスの徒は数比を基に客観的に理性で判断し、アリストクセノスは、アリストテレスの思想に影響を受け感性を重視し聴覚に判断を委ねたと言われています。ボエティウスの『音楽教程』は、この響和感の把握･理解に格好の書といえるでしょう。

#### Ⅲ－１　響和・不響和の定義

［Ⅰ－８］　響和･不響和の定義は次のようです。「響和は高い音と低い音が混じり合って耳に心地よく一つになって響くもの。不響和は相互に混じり合って耳に伝わる耳障りな不愉快な 2 音の衝撃。」

［Ⅴ－11］　響和音程４度及び 5 度がオクターヴと組まれた場合の響和・不響和について、ピュタゴラスの徒と異なる意見としてボエティウスはプトレマイオスの考えを述べています。「3 倍の比率関係にある diapente＋diapason、或いは 8:3 の比率関係にある diapason＋diatessaron は響和音程である。」この理由はプトレマイオスの主張するオクターヴの同質性にあります。

#### Ⅲ－２　響和判断における感覚＜sensus＞と理性＜ratio＞

この問題はピュタゴラスの＜鍛冶屋の神話＞に既に存在したのです。鍛冶屋の前で聴いた槌音の心地よさから比率の計算が始まったのです。［Ⅰ－９］:「この学問の全源泉は聴感覚にあるのだが――聞えなければ音について云々することはできないのだから――しかし総ての判断を感覚に任せてはいけない。･････最終的な認知能力は理性にある。理性は一定の規則に則って決して過ちを起こさない。感覚は人それぞれに独自のものであり、また一個人においても何時も同じではない。･････ピュタゴラス派の人々も調和は耳で判断したのだが、その幅（iter）の判断は耳に任せるのではなく、ある規則と計算に委ねた。」と書かれています。［Ⅰ-28］でも同様な内容が見られます。

［Ⅰ-10］においてボエティウスは再度ピュタゴラスの響和判断について述べています。「彼は人間の耳を信用していなかったばかりでなく、器具のもつ不確かさにも触れている。つまり弦の湿気による変化を考慮している。それで響和の全知識を理性（ratio）によって極めるべく、その方法を探していた。」

また［Ⅲ-9～10］では全音より小さい音程（小さい半音・大きい半音・アポトーム・コンマ）に関する響和（consonantia）の判断について述べています。「総ての響和は魂（思惟 animus）と耳で認識することができる。理性と知識のみでは、もし以前に実践と経験を通して体得していなければ、これ等の調和は納得の認知には至らない。」

［Ⅴ-2］では、調和の本質(vis　armonicae)について述べています。つまりその判断の手段は何か、どの程度にまで感覚にゆだねられるか。基本姿勢は：「armonica とは高い音と低い音との間の差を聴覚と理性を使って測る学問分野である」です。感覚はその差を凡その値で認知し、理性は完全な決定的な差異を巡って判断を行うのです。すなわち「感覚は隣接する音高の差異を真実に近いかたちで把握し、他方理性はその差を完全な測定によって考察する」のです。

**響和の判断に関するピュタゴラス、アリストクセノス、プトレマイオスの意見**

［Ⅴ-3］でボエティウスは「ピュタゴラスの徒、アリストクセノス、プトレマイオスは、響和の基準を如何に説明しているか」について述べています。　ピュタゴラスの徒：「総てのものは理性によって響和に齎される。感覚は（認知のために）いわば何らかの種をまき、理性が種の成熟を促す」；アリストクセノス：これと対照的に「理性はパートナー、つまり２次的なもので、総ては感覚の判断によって決定される。」；プトレマイオス：「先ず感覚が評価したものを理性が比率でもって確定する。」

更に［Ⅴ-4］では、音程の本質について、すなわち＜量的＞であるか、＜質的＞であるかを問題にして３者の違いを述べています。ピュタゴラスの徒：「音高間の差を量的に測る＜quantitas＞（＝比率計算）。」；アリストクセノス：「高さ低さに関する音間の差は質＜qualitas＞にある（例えば音程間の弦の緊張と弛緩関係）。」；プトレマイオス：「音の高低の差は質にあるのではなく、量にある。なぜなら密で薄い物体は高い音を、疎で大きい物体は低い音を発する、と考えている限り、ピュタゴラス派に属する。」しかし［Ⅴ－５］におけるプトレマイオスの２音間の関係を虹のグラデーションに例えた説明は、彼の立場をアリストクセノスに近づけています。＜音楽＞を考えて響和の判断には理性と感性の関わりは必至のことでありましょう。

次回は、＜全音の２分割＞および＜オクターヴ＋4 度の響和・不響和＞を巡る異見について採り上げます

**（※この文章は音の科学〔Ｘ〕の一部が掲載漏れになっていたものを補ったものです）**

歌ってみたい！　　弾いてみたい！　　心に残る日本の作品

# 日本音楽舞踊会議の出版楽譜のご案内

　このコーナーは、本誌裏表紙に掲載されていました、本会から出版された楽譜を隔月で紹介するコーナーです。
　前回は、宮田滋子さんの童謡詩集「星のさんぽ」「ハミングバード」から作曲された、高橋雅光作品“おかあさんといっしょにうたう、新しい童謡集「どんぐりっこのメロディー」”をご紹介しました。
　「こどもの歌を創る方の難しさは、曲を聴けばこどもから大人・お年寄りまで、作品の内容（質）から善し悪しまで解かってしまう。それだけに旋律が魅力的であり、表現は自然・率直・簡潔である事が大切」と語っていました。
　今回は、本会会員として在会中にご他界された方の作品を、生前のエピソードを含めながらご紹介しましょう。ご紹介する作曲家は、黒髪芳光氏と小平時之助氏です。

黒髪芳光　作品
「こどもの祭りⅡ」ピアノのための四手連弾曲集
（バイエル・メトードローズ併用）
こども同士や親子の連弾といろいろな楽しみ方が出来る作品。
快活なこども達の笑顔が、こぼれおちそう。
初級クラスでは、連弾で楽しめる作品が少ないので、
レッスンの副教材や発表会での演奏曲目としてもお勧めします。（初級上）
A4 版 20 頁　　2,100 円

小平時之助　作品
　歌曲集「北の国から」高橋仁詩（1976 年）
　「木地山ぼっこ」「ほしがき」「ナマハゲ」他全 5 曲
　日本全国の民謡・民俗音楽を採集し、民衆との
　接点・視点で音楽を捉え、生活と密着した中から
　作品創りを展開してきた作曲者と、北の国の詩人が、
　がっぷり四つに組んだ歌曲集。
　東北地方の生活の匂いや、人の温もりが
　肌で感じられる作品であり、国内外で
　歌っていただきたい一押しの作品。
A4 版 14 頁　　1,890 円

　＜黒髪芳光氏の人柄と音楽＞
　ここで、ご生前親しくして頂いた思い出など、作曲家黒髪芳光氏の横顔や人柄についてエピソードを含めながらお話をしましょう。

黒髪氏と初めてお会いした時の第一印象は、名前の通りふさふさした真黒い髪の毛を、きれいにオールバックにして、声をかけると初対面とは思えないくらい親しい笑顔で「やあ」と応えて頂き、すぐに緊張がほぐれ、心が和んだ事を昨日のように思い出します。また、黒髪氏に電話をかけると、受話器の向こうから三波春夫の歌声のような明るい声で、「こんにちは」と返事が返ってきます。若輩にも嫌味な思いをさせない、とても好感のもてる方でした。

作品について触れてみますと、声楽曲が多かったように思いましたが、演奏会をご一緒した時に、リハーサルを覗かせて頂き、その時の日本語の発音について、演奏者に厳しく指摘をされていた事等、音楽に対峙する時の厳しい姿勢は、とても印象に残りました。それと、ご自身は洋楽系の作曲家でありながら、日本の伝統音楽や文化に大変関心が強く、作品の中に日本の旋法を取り入れたりして、音楽創りのあり方について、ひとつの方向を示されたように実感しました。

＜小平時之助氏と民俗音楽＞

小平時之助氏はとても行動力のある方で、日本各地を巡り民謡やわらべ唄・神楽等を精力的に収集して、それらを作品創りに反映させていました。

小平氏の作品創りは、そういう民俗音楽を通じ、一般民衆・庶民とのかかわりあいの中から生まれ出てくる力・エネルギーを原点にしていると言っても過言ではないでしょう。それは、社会の出来事も庶民の視点と同じ視点で眺め、庶民の生活を脅かすもの、苦しめる者への怒りや、頑固なまでの正義感とも共通していると言えます。

そういう民衆との接点の中で、共に笑い・共に泣き・共に怒る。小平氏の作品が、今生きていることを実感するような親近感が有り、社会性を持った内容になっていて、それをご自身の作風としているところに独特な個性を感じます。

小平氏と黒髪氏の人柄を語る上で共通して言える事は、どちらも柔和なやさしい人でした。小平氏は、人と話す時には柔和な笑顔を浮かべ、やや伏し目がちで、時々上目遣いで人を見ながら、恥ずかしそうにお話をされるのが印象的でした。

今でも、鳥打帽子を被り、スラッとして背の高い痩せ形の体型で、肩からショルダーバッグを掛け、颯爽と登場する様子が目に浮かんできます。

**＜楽譜出版部からのお知らせ＞**

**現在、津田裕子氏の楽譜制作に入っています。楽譜出版をご希望されている方々にはお待ち頂いているところですが、もう少々でお声を掛けられる予定です。**

**これから出版をご希望の方もご応募を受け付けておりますので、お早めに事務所まで御連絡を下さい。**

**尚、現在紀伊国屋書店・オリコンリサーチ・Google 等のデーターベースに載せるために申請中です。**

**出版局楽譜出版部　高橋雅光**

## 歌曲集　ヒロシマのツル

†あの日が近づくと

西岡　光秋詩
黒髪　芳光曲

Larghetto おだやかに ♩≒66

1

mf

♩.≒66

mp

ひ　まわ　り　よ　　よ　う　き　な　か　お　を　し　て　　な　ぜ　か

♩=♩.

mp

mp

き　お　ち　　し　て　い　る　よ　う　だ

allarg.　mf　a tempo

せ　み　よ　　に　ぎ　や　か

allarg.　a tempo

な　　こ　ん　せ　い　が　っ　し　ょ　う　な　の　に　　ど　こ　か　　し　ず　ん　だ　ト　ー　ン　だ

mp

mf

mp

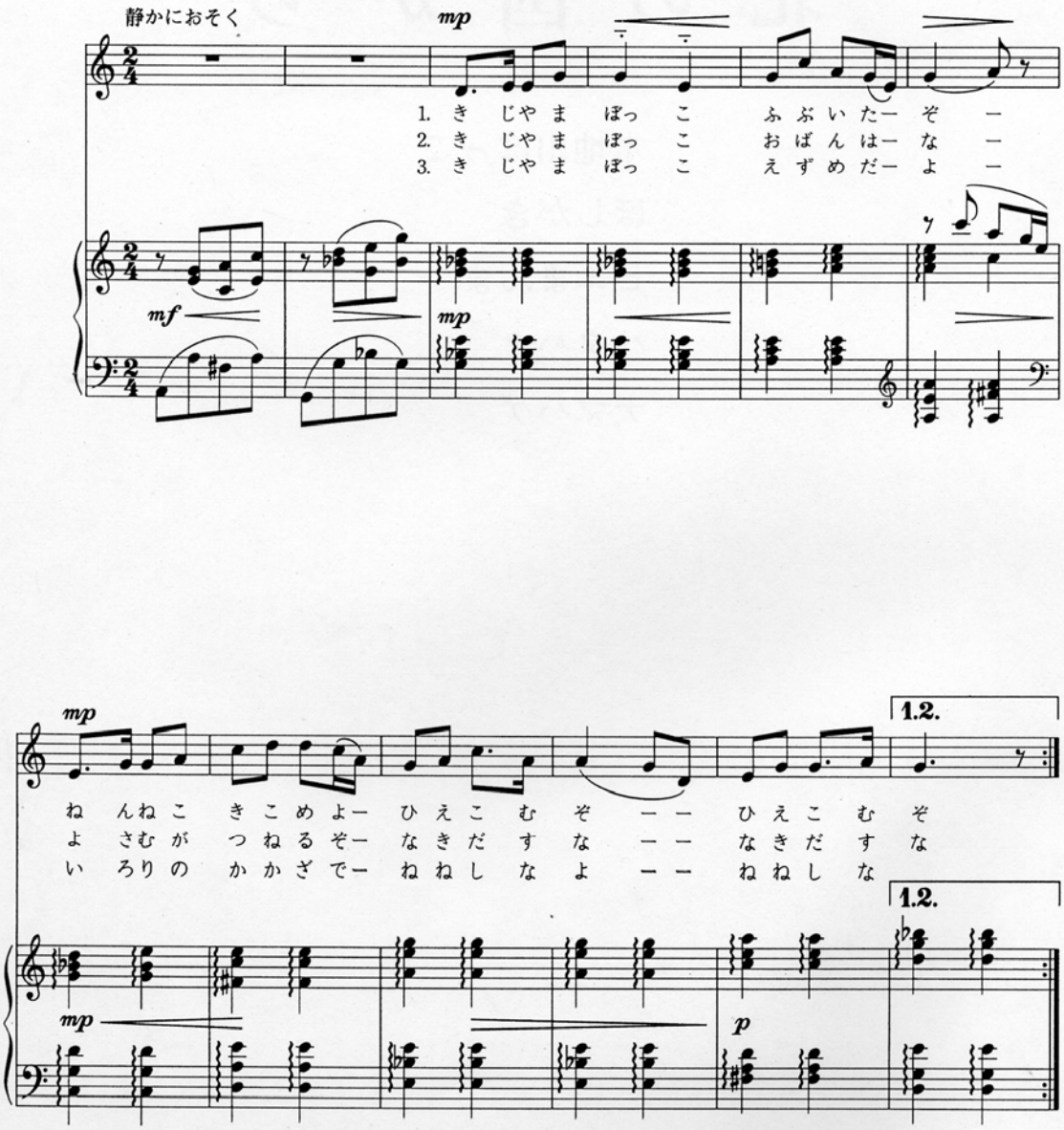
mp

© 1989 by ONGAKU NO TOMO SHA Corp. Kagurazaka 6-30, Shinjuku-ku, Tokyo, Japan.

黒髪芳光　歌曲集「ヒロシマのツル」より

# 木地山ぼっこ

高橋　仁 作詩
小平時之助 作曲




小平時之助　歌曲集「北の国から」

深沢亮子　藤井洋子　恵藤久美子　安田謙一郎

# ピアノと室内楽の夕べ

**日本音楽舞踊会議創立 50 周年記念**

12 月 6 日（火）午後７時開演　音楽の友ホール

主催：日本音楽舞踊会議　後援：月刊『音楽の世界』

実行委員：北條 直彦

《プログラム》

モーツアルト　ピアノ、クラリネットとチェロ（ヴィオラ）のための三重奏曲
Es-Dur K.498

シューマン　三つのロマンス　Oo.94

助川 敏弥　松雪草（２０１０年作曲　初演）

モーツアルト　ピアノ三重奏曲第四番　B-Dur K.502

深沢 亮子（ピアノ）／藤井 洋子（クラリネット）
恵藤 久美子（ヴァイオリン）／安田 謙一郎（チェロ）

## 演奏者プロフィール

**深沢 亮子（ピアノ）**

15 歳で日本音楽コンクール首位受賞。ウィーン国立音楽大学に留学し首席で卒業。1961 年ジュネーヴ国際音楽コンクール１位なしの２位。以来、ムズィークフェライン黄金の間やコンツェルトハウス等で度々オーケストラとの協演を始め、日本、ヨーロッパ、南米、アジアの諸国で精力的に演奏活動を行い、日本の作品も度々紹介している。また、国際音楽コンクールや日本音楽コンクール他の審査員を務める傍らラジオ、TV に出演。数多くの CD、著作、楽譜の出版。一昨年はデビュー55 周年記念リサイタルを春秋東京にて行ない好評を博す。日本音楽舞踊会議代表理事。

**藤井 洋子（クラリネット）**

桐朋学園大学音楽学部管楽器科を経て、１９８１年渡仏。フランス国立高等音楽院クラリネット科入学。クラリネットをギイ・ドウブリュ、初見をギイ・ダンカン、室内楽をクリステイアン・ラルデの各氏に師事。在学中にヨーロッパ音楽院間交換演奏会をロンドン、ダブリンで行う。１９８３年、フランス国立高等音楽院クラリネット科を1 等賞で卒業。同年帰国。

第1 回「クラリネットコンクール」1 位。第2 回「管・打楽器コンクール」第2 位（1 位なし）。「トウーロン国際コンクール」銅メタル。１９８６年～１９９０年まで新日本フィルハーモニー交響楽団副首席奏者。１９９１年、読売日本交響楽団首席クラリネット奏者として入団、現在に至る。１９９６年、東京文化会館小ホールにてリサイタル開催。１９９８年、NHK.FM「ベストオブクラシック」に出演。２００１年、読売日本交響楽団とウエーバーのクラリネット協奏曲第1 番を共演。２００３年、チェコ・フィルハーモニー八重奏団とモーツアルトのクラリネット五重奏曲を共演。２００８年、ウイーンコンチェルトハウス・リサイタルホールでモーツアルト及びブラームスのクラリネット五重奏曲のリサイタルを開催し、翌２００９年にはアートユニオンから「モーツアルト・ブラームス：クラリネット五重奏曲」のCD をリリースするなど、ソロや室内楽に於いても活発な演奏活動を行っているほか、桐朋学園大学講師、桐朋学園短期大学講師として後進の指導にも力を注いでいる。

**恵藤 久美子　（ヴァイオリン）**

3 歳より母にピアノを、5 歳より父にヴァイオリンの手ほどきを受ける。7 歳の時、斎藤秀雄氏の薦めにより、ヴァイオリンの道を歩み始める。同時に桐朋学園「子供のための音楽教室」鎌倉分室へ入室する。ヴァイオリンを鷲見三郎、鷲見健彰、海野義雄の各氏に師事。室内楽を黒沼俊夫、斎藤秀雄両氏に師事。第 41 回日本音楽コンクール第 2 位入賞。

1972 年、兄、堤剛と「二重奏のタベ」を、東京とカナダのオンタリオにて開催。1979 年、リサイタルで弘中孝氏と共演。2003 年、2004 年、2005 年、２月深澤亮子氏、安田謙一郎氏とピアノ、ヴァイオリン、チェロのタベを開催。
2002 年 7 月には、深澤亮子氏とヴァイオリンとピアノのタベを開催。2004 年 6 月中野洋子氏とデュオコンサートを開催。東京フィル、新日本フィルとメンデルスゾーンの協奏曲、札幌響とシベリウスの協奏曲、山形響とモーツァルトの協奏曲、桐朋学園オーケストラとブルッフの協奏曲を共演。その他アマチュアオーケストラとの共演も数多い。

1975 年より約 10 年間、桐五重奏団のセカンドヴァイオリンとして活躍する。また、1980 年より 2 年間山形交響楽団の客演コンサートマスターとして在籍する。現在、アンサンブル・アルス・ノバ コンサートマスター。桐朋学園大学特任教授。日本音楽舞踊会議会員

**安田 謙一郎（チェロ）**

1955 年斎藤秀雄に師事。1966 年第 3 回チャイコフスキー国際コンクール第 3 位入賞。ガスパール・カサドに師事。1968 年よりピエール・フルニエに師事。1973 年以降、ヨーロッパ各地で、リサイタル、コンチェルト、レコーディングなど多方面で活躍、74 年小澤征爾指揮サンフランシスコ響と共演。プラード・カザルス、サン・モリッツ、モントルー、グスタード・メニューインなどのフェスティバノレに参加。1986 年には安田弦楽四重奏団を結成、クワルテットの活動にも多くの力を注ぎ、80 曲におよぶハイドンの弦楽四重奏曲全曲演奏、ベートーヴェン年代順室内楽の演奏会等、意欲的なコンサート活動を続けている。日本音楽舞踊会議会員。

## 《曲目解説》

**モーツアルト　ピアノ、クラリネットとチェロ（ヴィオラ）のための三重奏曲（ケーゲルシュタットトリオ）Es-Dur　K.498**

モーツアルト、３０歳、１７８６年の作。この年は彼が音楽家として最も豊かな軌跡を残したと云われる年でもある。例えば大作としてはこの時期には有名なオペラ『フィガロの結婚』や交響曲　プラハ等の完成が挙げられる。

ところで、この曲は彼の友人でクラリネット奏者のシュタットラーなどの仲間同志で演奏し楽しむために書かれた曲と云われているが、内容はそれほど軽いものでなく、立派な三重奏曲と言えよう。それと、この曲の編成だが初版楽譜では商業上の必要からかクラリネットに替えてヴァイオリンでも同じパートを弾ける様になっているのだが、今回はクラリネットはそのままで、オリジナルであるヴィオラのパートをチェロが受け持って弾く事になるので、新たにこの曲の別の面のサウンドが楽しめるかもしれない。

**第１楽章　アンダンテ Es-Dur　８分の６拍子**

冒頭に幾分どっしりとしたテーマが出るが、其の首頭部分が執拗にモチーフ操作され、モーツアルト特有の愛らしい第2 のテーマへと進んで行く。曲は殆どと云って良い程この二つの要素で出来ており、モーツアルトらしい変奏や、転調が楽しめよう。

**第２楽章　メヌエット　B-Dur　４分の３拍子**

メヌエットにしては左手のオクターブが少々重たく思えるしっかりした前半に比べ、3 連符が細かく駆け巡る嬉遊的なトリオがこの楽章の見事な対照を形作っている。

**第３楽章　ロンド　アレグレット　Es-Dur　４分の４拍子**

ソナタ的な様相を持つ自由で変則的なロンド。ロンドに相応しく全体として気楽な、そして楽しい気分が溢れた曲と云って良い。のどかで親しみ易い第一のテーマと半音下降を含む第2 のテーマと、其の後に続く1 6 分音符によるピアノの動きが形を変えつつ繰り返され、前半が終わる。次の中間部はチェロの特徴的なリズムと3 連符からなるテーマから出発し、クラリネットも加わるのだが、次に第1 のテーマがチェロで出る時には先程の3 連符のリズムがピアノの伴奏として現れる立体性は、ソナタ的な展開と云って良いだろう。その後も新しい要素を加えつつ第1 のテーマが最初はクラリネット、次がピアノソロに現れ、続いてピアニステイックな1 6 分音符が駆け巡る主音上の長いコーダに入り盛り上がって曲は終わる。

**シューマン　三つのロマンス　Op.94**

シューマンはロマン主義文学の理念を音楽作品の中で実現した1 9 世紀に於けるロマン派音楽の先駆者であった。彼が優れた文学的教養を背景に「音楽新報」誌を主宰し、活発な評論等の執筆活動によっても新音楽の地平を切り開いた事の次に今では広く知られている。この曲は1 8 4 9 年、シューマン、3 9 歳の時に書かれた珠玉の小品である。この年は彼自身も「僕の最も実り豊かな年」と、いみじくも語った様に彼の創作の全盛期であった。この時期にはマンフレッド（3 部の劇詩）、マンフレッド序曲、森の情景（ピアノ曲）他、多くの円熟した傑作が書かれている。所でこの曲は本来、オーボエとピアノのために書かれた曲なのだがクラリネット等、他の楽器での演奏もシューマンは許可していた事も事実のようである。今夜はクラリネットとピアノのデユオを楽しんで頂きたい。

**第１曲　速くなく　a-moll　４分の３拍子**

冒頭のピアノの和音に呼び寄せられてシューマンに特徴的な愁いを帯びた a-moll～C-Dur 間を揺れ動く旋律が登場し、それが軸となって和声の変化や、対位的な動きを伴ってピアノとクラリネットが絡み合って行く一貫して感傷的な小曲。

**第２曲　飾らずに、愛情を込めて　A-Dur　４分の４拍子**

三部分形式の曲で、最初の旋律は一時の安らぎと希望を与えるが、中間部では内に情熱を秘めた旋律が現れる。それは恰も作者の内面の葛藤を表しているかのようだ。しかしまた、其の波風は治まり落ち着いた牧歌的な安らぎが訪れる。

**第３曲　速くなく　a-moll　４分の４拍子**

3 部分形式の曲。1 曲目と同じ a-moll だが、同じ感傷的な旋律でありながらこちらの方は、寧ろ、未来に仄かな希望を見る様な曲の雰囲気がある。それは一時的に現れる明るい E-Dur への転調の場面に現れているかもしれない。最初、ピアノで歌われる中間部ではおおらかな旋律を縫って両手で取る内声のアルペジオが出るが、これは、彼のピアノ曲”Noveletten”の一曲目や、今日の最初の3 重奏の TRIO 部分でも見られた彼の好んだ美しいフィギアーの一つである。再現部は変化する事なく繰り返され、短いコーダへと続くのだが最終和音は A-Dur で終わっており、これは先述した、一つの、希望、或は、祈りを表している様にも聴こえるのではないか。

**助川敏弥　松雪草（2010）**

2010 年の作品。私は簡素の美をもとめるようになっていた。ひとことで言えば、Sonatine Album、に収録されている Friedlich Kuhlau の Sonatine のような簡素単純な曲を新しい語法で作ることはできないか、ということであった。この曲はその指向の結果のひとつである。

古典的 Sonata 形式の第一楽章の形式でできている。提示部、展開部、再現部、の古典的形式で端正にととのえた。途中の展開部では、一時、無調の世界に入り込む。無調と調性の融合混在は私の中につねにある幻想音楽の世界である。この中でひそかに、「Tristan と Isolde」の旋律が現れる。なお、英文題の「Primrose」は、「松雪草」の英訳ではない。「さくら草」の意味である。私の曲には「さくら」の言葉にちなんだものが多いので、混同を避けるため英文題と日本語題とを承知の上で意味の違う言葉を用いた。演奏時間約 7 分。

（助川敏弥）

**モーツアルト　ピアノ三重奏曲第四番　B-Dur K.502**

プログラム最初のケーゲルシュタットトリオと同じ1 7 8 6 年に書かれたピアノ、ヴァイオリン、チェロと云う典型的なピアノトリオで、　モーツアルト特有の明るく、軽快で活発さに充ちた曲。

**第１楽章　アレグロ　B-Dur　４分の４拍子**

自由なソナタ形式。最初、主音ペダル上に3 度、そして6 度を伴った第一テーマが出る。このテーマがもう一度現れて第2 テーマへ移行しその後は提示部の長い結尾部分に第一テーマの一部が現れて第2 の結尾に続き提示部が終わる。展開部では第一テーマに由来する爽やかな新しい旋律が登場し、第2 テーマのモチーフが続き、更に、第一テーマの首頭部分が転調を重ねつつ再現部へと回帰して行く。尚、第2 テーマも第一テーマに対して最初に現れたオブリガート的なモチーフ断片に由来している事も注意点として留意しておこう。

**第２楽章　ラルゲット　Es-Dur　４分の３拍子**

遅い楽章だが ABACAD のロンドと考えられる。
深く、落ち着いた雰囲気の旋律がピアノ、次にヴァイオリンで繰り返された後最初のテーマに由来するターンを伴った第二の旋律がピアノ上で出る。つぎに As-Dur で中間部の旋律がピアノで歌われさらにヴァイオリンに続き最初の部分に復帰する。

**第３楽章　アレグレット　B-Dur　　2.分の２拍子**

この曲はソナタ的なロンドと考えられる。冒頭ピアノ独奏で現れるロンドらしいテーマは次にはチェロの支えを伴ったヴァイオリンの強奏で奏される。そして短い2 小節の繰り返しを伴った新たな旋律がピアノの属調上に出、次に第2 テーマに相当するする部分が現れる。これをピアノがコンチェルトに良くある様に受け継いで行く。そして、第一のテーマと関係づけられる橋渡しのテーマがまずヴァイオリン、受け継いでピアノに現れ、次に第一テーマが移行的に属調に出現した後、これの尾ひれの部分の反復進行の後、この最初のテーマが完全な形で復帰する。これを受け継いだヴァイオリンはチェロを伴いつつソナタの展開部の様に転調を重ね Es-Dur での第2 のテーマに到達する。これも展開部的転調を重ね、真の再現とも云える原調 B-Dur に辿り着き、ピアノ、バイオリンの順で出て、同じく原調の第2 テーマも再現し、コーダに入り盛り上がりのうちに曲は終結する。

北條直彦　記

**トピックス：日本尺八連盟の会長人事**

公益社団法人日本尺八連盟は今期より通常総会及び理事会において、前会長鳩山邦夫氏の後任として、新会長に竹師坂田誠山氏が選任されました。
坂田誠山氏は「現在の邦楽界はとても難しい局面を迎えていますが、危機感を持ちながら斯道の活動に邁進することが、局面を打開するものと信じつつ、伝統の継承及び発展、また新しい魅力の重要性をも念頭に置きながら、皆様方のご指導、ご支援を得て会長としての任務を全うしたい」と述べていました。

高橋雅光記

# 時評　小さな国からの大きな問題提起

## ～ブータン国王夫妻来日～

ヒマラヤの秘境ブータン王国の若い国王が、新婚間もない美しい王妃をともなって来日したニュースは、近頃にない明るいニュースだった。ジグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク国王は、我が国の国会で演説し、被害日本大震災の被災地を訪問し、子供達に語りかけた。そして、10 月 29 日に NHK スペシャルで放送された幻の蝶「ブータンシボリアゲハ」の標本が国王から我が国に贈られた。

ブータン国王夫妻の来日で、一躍注目されたのは、前国王時代に提唱され、今でもこの国でもっとも重要な価値基準とされている国民総幸福量（Gross National Happiness, GNH）という概念だろう。我々は日常、GNP（国民総生産）、GDP（国内総生産）という言葉は、経済ニュースなどで耳にタコができるほど聞かされており、その数値の上下に一喜一憂しているが、GNH は耳慣れない言葉である。GNH は 1.心理的幸福、2.健康、3.教育、4.文化、5.環境、6.コミュニティー、7.良い統治、8.生活水準、9.自分の時間の使い方の 9 つの要素から構成されているそうだ。すぐ数値で示すことが出来ろ GNP に比べ、どの構成要素も数値化するのは難しそうにみえるが、ブータン政府は国民総幸福量の増加を政策の中心としており、２年に一度の国勢調査の際には、一人あたり５時間かけて様々な項目で聞き取り調査を行い、8000 人のデータを集めるそうである。

ブータンの１人当たりの国民総所得は我が国の 1/10 以下だが、2005 年の国勢調査では国民の 97％が「幸せ」と回答した。その結果について、「ブータンだって、もっと物心両面で国際交流が進めば、他のアジア諸国のように、より物質的豊かさを求めるようになるさ」と皮肉な見方をする人もいるかもしれないが、「経済成長率が高い国や医療が高度な国、消費や所得が多い国の人々は本当に幸せだろうか。先進国でうつ病に悩む人が多いのはなぜか。地球環境を破壊しながら成長を遂げて、豊かな社会は訪れるのか？」という問いかけから生まれた GNH 重視のブータンの国策は、金融危機に揺れる欧米先進国の人々の考え方に強い影響を与え始めているそうである。

我が国の国民の多くも、３月の大震災以降、「人間にとって一番大切なものは何か、本当の幸せとは何か」ということを改めて自問自答するようになった。GNH 重視の国から訪れた若く聡明で幸せそうなブータン国王夫妻の来日は、我々に対して、幸せの尺度とは何か、という大きな問題提起をしてくれたのではなかろうか？

（水の惑星人）

# 会と会員の情報

## ＣＭＤＪ　会と会員のスケジュール

１２ 月

4日(日)《フェードールの受難》脚色：金原礼子　作曲：成田和子
【恵比寿：日仏会館　14:30開演　3,000円】

4日(日)栗栖麻衣子リサイタル～　ベートーヴェンソナタop.101、シューベルトソナタ D.959他　【ルーテル市ヶ谷センター　18:00開演　3,000円】

4日(日)日本尺八連盟第36回全国尺八コンクール
独奏・アンサンブル本選会・京都市御池「葆光」ホール
審査委員長坂田誠山・審査委員高橋雅光他4名

6日(火) ピアノと室内楽の夕べ　　モーツァルト：ケーゲルシュタットトリオ、ピアノトリオ第４番、助川敏弥：松雪草（初演予定）深沢亮子(Pf.)、恵藤久美子(Vn.)、　　安田謙一郎(Vc.)、藤井洋子(Cl.)　【音楽の友ホール 19:00開演 4,500円】

6日(火)ピアノ部会総会【音楽の友ホールロビー集合16：00】

7日(水) 定例理事会【事務所19:00】

10日(土) 深沢亮子　麦の会チャリティーコンサート共演：岡山潔（Vn）他　助川敏弥：ジスモンダ（初演）ほか
【津田ホール14：30　主催問合せ：麦の会03-3556-3056】

16日(金)『音楽の世界』編集会議【事務所19:00】

18日(日)深沢亮子－東日本大震災のためのチャリティ・コンサート
【瑞浪市総合文化ホール　14:00】

２０１２年

1　月

7日(木) 日本音楽舞踊会議創立５０周年記念　新年会【高田馬場「夢々」
１８時より　会費５，０００円】

7日(木) 定例理事会【事務所16：00】

13日(金) 北川暁子　ピアノリサイタル　ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会
第２夜　　第3番、第13番、第21番“シュタイン”、第27番、第28番【津田ホール19:00一般5,000円、学生3,000円　問い合わせ:サウンドギャラリー03-3351-4041】

22日(日)声楽部会コンサート「2012年新春に歌う～夢と希望と、そして・・・」
【すみだトリフォニー小ホール　14：00　2,500円】
出演：佐藤光政・浅香五十鈴・内田暁子・浦　富美・金原礼子・小室由美子・高橋順子・渡辺裕子　　ピアノ：岸洋子・小室美佳・島筒英夫・志茂征彦・鈴木靖子　フルート：高須洋美　ヴァイオリン：渡辺せいら
演奏曲：「メリー・ウィドー」より「ヴィリアの歌」
「蝶々夫人」より「ある晴れた日に」「あの桜の枝をゆすって」（花の二重唱）
「カプレッティ家とモンテッキ家」より「おお、いくたびか」他

29日(日) フランス歌曲・研究コンサート　『ベルリオーズとフォーレの作品より』

【中目黒ＧＴプラザホール　時間未定 一般2,000円　　学生:1,000円】

2　月

11日(土・祭)日本音楽舞踊会議 第５０期定期総会

17日(金) 北川暁子　ピアノリサイタル　ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会
第３夜　第4番、第19番、第8番、第31番、第7番【津田ホール19:00　一般5,000円、　学生3,000円
問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041】

23日(木) 深沢亮子ピアノリサイタル　共演：ブリュッセル弦楽四重奏団　モーツァルト:ピアノ弦楽四重奏曲　第1番、第2番、助川敏弥作品、B.Mernier:弦楽四重奏曲『ハチとラン』【浜離宮朝日ホール19：00　主催問合せ:新演奏会協会03-3561-5012】

3　月

9日（金）深沢亮子－室内楽コンサートシューベルト：ます、モーツァルト：ピアノ弦楽四重奏曲第１番【久米美術館18:00
主催問合せ：日墺協会 03-3468-1244（水・木・金13～16時)】

12日(月)　『動き・舞踊・所作と音楽』コンサート
【すみだトリフォニー小ホール】　出品募集中

16日(金) ～東京藝術大学音楽学部北川暁子退任記念コンサート～
ベートーヴェンピアノソナタ全曲連続演奏会 第４夜 第10番　第22番　第29番
【東京藝術大学奏楽堂（大学構内）午後7時開演　入場無料【事前応募制】
お問合せ：東京藝術大学演奏藝術センター　050-5525-2300】

25日(日) 日本音楽舞踊会議主催「コンチェルトの夕べ」
【ヤマハ・エレクトーンシティ渋谷　16:00開演】出演者募集中（戸引）

4　月

13日(金) ＣＭＤＪフレッシュコンサート２０１２【すみだトリフォニー小ホール 18:30開演　2,500円 】参加者募集中

20日(金)北川暁子　ピアノリサイタル　ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会　第５夜　第2番　第20番　第15番　第16番　第30番【津田ホール19:00　一般5,000円、学生3,000円　問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041】

5　月

10日(木)作曲部会コンサート【すみだトリフォニー小ホール　詳細未定】

18日(金)北川暁子　ピアノリサイタル　ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会
６夜　第5番　第9番　第14番　第18番　第26番【津田ホール19:00　一般5,000円、学生3,000円　問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041】

6　月

15日(金)北川暁子　ピアノリサイタル　ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会　第７夜　　第6番　第11番　第12番　第24番　第32番【津田ホール19:00　一般5,000円、学生3,000円　問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041】

7　月

7日(土) 声楽部会コンサート　「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」
【すみだトリフォニー 小ホール14：00　2,500円　詳細未定】

13日(金)ピアノ部会コンサート【東京オペラシティリサイタルホール　19:00開演　詳細未定】

9　月

8日(土) 深沢亮子ピアノリサイタル　共演：ウィーン弦楽トリオ　モーツァルト:ケーゲルシュタットトリオ、シューベルト:ます　他【浜離宮朝日ホール 14：00】

21日(金) CMDJオペラコンサート2012 【すみだトリフォニー小ホール　詳細未定】

10　月

15日(月「様々な音の風景Ⅸ」～２０世紀以降の音楽とその潮流～
【すみだトリフォニー小ホール】 詳細未定

11　月

18日(日) 若い翼によるＣＭＤＪコンサート５（詳細未定）

---

# 新年会のご案内

2011 年は、東日本大震災という未曾有の大災害に襲われ、多くの尊い命が失われました。そして、いまだに郷里を離れて暮らしたり、仮設住宅で暮らしている方々が大勢いらっしゃいます。災害は悲しく苦しい体験でしょうが、しかし、被災された方々の、明るく前向きに生きようとされている姿をみて、人間の逞しさと素晴らしさを改めて認識しました。人間、前向きに進んで生きれば、必ず良いことにも出逢うと思います。

さて 2012 年(平成 24 年)は、日本音楽舞踊会議の創立 50 周年に当たる年です。この会は 60 年安保の年に創設され、半世紀の歴史を刻むに至りました。50 年といえば、戦後 65 年の４分の３の期間にあたります。その間には色々なことがありました。機関誌の継続が困難になったこともありました。しかし、色々な困難を乗り越え、創立 50 年を迎えたことは、やはり素晴らしいことで、誇ってもよいことではないかと思います。

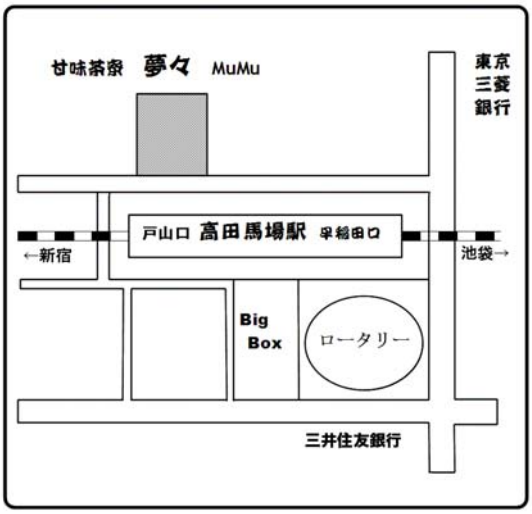
2012 年も例年のごとく、1 月 7 日に甘味茶寮「夢々 MuMu」にて新年会を開催します。創立 50 周年ということですので、趣向を凝らし、楽しく、そして意義深い会にしたいと考えております。会員の方々はもちろんですが、『音楽の世界』の読者の方々も遠慮なさらずに参加してください。そしてこの会と、『音楽の世界』の将来について語り合おうではありませんか。

代表理事：助川 敏弥、深沢 亮子
理事長：戸引 小夜子／機関誌編集長：中島 洋一（文責）

## 日本音楽舞踊会議　2012 年　新年会

【日時】2012 年 1 月 7 日（木）18:00～20:00
【会場】甘味茶寮「夢々 MuMu」
【会費】５,０００円

会場住所：東京都新宿区高田馬場 4-4-34
電話：03-3368-6166
会場へのアクセス：
JR 高田馬場駅の戸山口を出て　右折。
５０ｍほどの左側です。（地図参照）



## 編集後記

今年は、東日本大震災、ギリシャの信用不安から始まり各国に広がった金融危機など、暗いニュースが目立った年でしたが、11 月に幸福の国ブータンから来日した若い国王夫妻の笑顔は、わたしたちの気持ちを明るくしてくれました。今年もいつの間にか師走を迎えてしまいましが、来年は日本音楽舞踊会議創立 50 周年の年に当たります。我々の会は、色々難しいことが多かった昭和、平成の時代を、半世紀にわたって生き続けて来たのです。世界的な不況の中で、芸術文化活動を展開して行くためには、多くの困難がともなうでしょうが、このような時代だからこそ、我々の活動が必要なのではないでしょうか。1 月 7 日開催の新年会をみんなで祝い、次の新たな半世紀に向けて新しい一歩を踏み出そうではありませんか。編集部一同も心を新たにして、頑張りたいと思います。

（編集長：中島洋一）

**本誌は次のところでお取り次ぎしています**

| | | |
|---|---|---|
| 北海道 | ヤマハ・ミュージック札幌店 | 011-512-1726 |
| 福　島 | 福島大学生協 | 024-548-0091 |
| 千　葉 | 紀伊国屋書店千葉営業所 | 043-296-0188 |
| 東　京 | オリオン書房外商部 | 042-529-2311 |
| | ㈱紀伊國屋書店　和雑誌ｱｸｾｽｾﾝﾀｰ | 03-3354-0131 |
| | アカデミア・ミュージック㈱ | 03-3813-6751 |
| | 全国学生生協連合会図書サービス | 03-3382-3891 |
| | 早稲田大学生協ブックセンター | 03-3202-3236 |
| 神奈川 | 昭和音楽大学購買店 | 046-245-8100 |
| 静　岡 | 吉見書店 | 054-252-0157 |
| 愛　知 | 正文館書店外商部 | 052-931-9321 |
| | マコト書店 | 052-501-0063 |
| 大　阪 | ㈱ﾔﾏﾊﾐｭｰｼﾞｯｸ大阪心斎橋店 | 06-211-8331 |
| | ユーゴー書店 | 06-623-2341 |
| 兵　庫 | ㈱ジュンク堂書店　外商部 | 078-262-7794 |
| 京　都 | 龍谷大学生協書籍部 | 075-642-0103 |
| 沖　縄 | 沖縄教販(株) | 098-868-4170 |

編集長　：中島洋一　副編集長 ： 橘川 琢
編集ｽﾀｯﾌ：新井知子　浦 富美　大久保靖子　栗栖麻衣子　高島和義　高橋 通 高橋雅光
戸引小夜子　北條直彦　湯浅玲子

**音楽の世界 12 月号**(通巻 534 号)
2011 年 12 月 1 日発行　　定価 500 円(本体 476 円)
発行人：芙二　三枝子
編集・発行所　日本音楽舞踊会議　The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN
〒169 - 0075 東京都新宿区高田馬場 4 - 1 - 6　寿美ビル 305　Tel/Fax:(03)3369 7496
HP：http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　E-mail：onbukai@mua.biglobe.ne.jp
A/D：音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496　印刷：イゲタ印刷㈱ Tel: (04)7185 0471
購読料　年間：5000 円　(6 ヶ月：2500 円)　振替 00110 - 4 - 65140（日本音楽舞踊会議）

＊日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております
＊乱丁、落丁がございましたらお取替えします